オリジン

ふとん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オリジン

【Ｎコード】
Ｎ８７７９Ｋ

【作者名】
ふとん

【あらすじ】
人の世界の裏側に、もう一つの世界がある。
そこは百鬼夜行の行き交う人ならざる者の世界。
のはずだったが。
暗闇が急速に失われつつある現代では意外と近くで住んでいるのかもしれません。
たとえば、あなたのお隣りに。

就職斡旋所

今日もこのフロアはごった返していた。

何台ものパソコンの前に、焦燥と不安を抱えた人々が不景気な顔でじっと居座っている。そうかと思えば、喫煙所で苛々と煙草を吸う者、待合所のソファで苦笑いしながら不幸自慢をし合っている者もいる。

アナウンスが鳴るたびに喧騒が退いていく波のように弱まり、また膨れ上がる。ここには崖っぷちの倦怠感が満ちている。

人生の岐路を強制する場所、職業安定所である。

暗いイメージを払拭しようとしたのか、淡い色使いで壁紙やカーペット、調度品などが統一されているが、それで気分が解消される者はいない。

そんな中、一人、ソファに腰掛けている男がいる。

理想的な人物像を描いた名画から抜け出てきたような長身である。細い顎の白皙の容貌には武骨なサングラスがあるが、その造形はひどく端正だとすぐにしれた。だが、真夏だというのに黒のジーパンと黒のコートを着込んでいる。その上、肩まで届きそうな髪は取ってつけたような黒髪だった。

女声アナウンスが鳴った。

男はおもむろに立ち上がり、カウンターに首をもたげる。

「貴恵村数斗さん」

この派手な男には明らかに似合わない名を呼んで、担当の女性受付員は少し目を見張ったが、手慣れた様子で書類を男に向けた。

「ご希望の募集は無いようです。ここの……深夜勤務だけでなら幾つか募集はありますよ」

男はカウンターに少し身を乗り上げた。

「そ、そんな……」

こんな言葉でなければ聞き惚れてしまいそうな声だった。だが、甘ったるい声は情けなく濁る。
「せめて月四回の休暇だけでも…」
「そう言われましても…。深夜勤務はほぼ毎日ですし、最高でも月二日しか有休は認められていません」
無情な受付嬢の言葉に、男は唸る。
「バイトでも良いですから…」
「アルバイトの場合も同じです」
「そこを何とか！」
顔の前に手を合わせて拝む男に向かって、受付嬢は判決を下す。
「お仕事を作るのは、私の仕事ではありませんので」
「ちょ、ちょっと…」
「お仕事がありましたら、お知らせいたしますから、いつものようにご登録ください。次の方、どうぞ」
男は次の客に押し退けられる形で、結局はその場を追い出された。

路地裏

「……腹が減って目が霞む…」
数斗はひとりごちて、ディスプレー画面を睨みつけた。
一日一食の生活をもう三週間も続けているのだ。腹も限界になって当然だ。
サングラス越しに移り変わる画面はいずれも色よいものではない。
幾ら条件を打ち込んでも、検索画面に項目は並ばないである。
「…職探しって難しいもんだな…」
今更ながら溜息混じりに呟いて、顎を手の平に乗せて机に肘をつく。
先ほど、カウンターで締め出しを食らってしまったのだが、あきらめきれずにこうしてパソコンで検索しているのだ。しかし、一向に画面は項目を表示しない。
駄目か。
サングラスの中の目を細めて、黒コートの裾を払うと傍目には颯爽と、内心はうんざりと、席を立った。
「――キエムラカズトさん？」
自分の名を呼ばれ、ふと振り返る。
人ごみの中にありながら、その女はまるで舞台の中心にでも居るように堂々と立っていた。
若い女性たちがこぞって解るような、いかにもブランドものの高そうなパンツスーツを着こなしている。ハイヒールだとはいえ、かなりの長身である。腰までありそうな長い髪は淡い茶色に輝いている。細い首の上の容姿は端正で、普通の男ならば振り返らずにはいられない、魅力的で上等な美人だった。
女は千年の眠りも覚めるような笑みをこちらに向けると、改めて意思の強そうなこげ茶色の瞳を据えた。
「キエムラカズトさんよね？」

「……ええ、まぁ」
似合わない、と十人中十人から断言される名前を出されて、数斗は顔を歪める。
いくら美人でも、突然見知らぬ人間に名指しされれば、警戒もする。
応えて、気がついた。
この女、誰からも見られていない。
これだけ目立つ容姿であれば、注目を浴びないはずはない。しかし、彼女を誰一人として気にする者がいないのだ。
数斗は初めて、女を正面から見据えた。
「――アンタは？」
女は微苦笑すると、からかうように上品な口元を綻ばせる。
「セト・マリよ」
聞き覚えのない名前だ。
胡散臭い人間とは関わらないのが、人生を上手く生きるコツである。
「俺に何の用があるのかは知らないが――」
即座に踵を返す。
「先に言っておく。俺には関わるな！」
言い置いて、数斗はその場から駆け出した。
「ちょっ、ちょっと！　何でいきなり逃げるのよ！」
さすがに慌てた様子で女が追いかけてくるが、既に声は遠い。
人を掻き分け、職業安定所を出て、このビルのエレベーター横の階段を一息に駆け下りる。そして、表からではなく裏から数斗は飛び出した。そのまま、複雑に入り組んだビル街の隙間を走り出す。
いつものことだ。
こうして追われることには慣れている。そして、先手を打つことも。
幾度となく繰り返してきた経験の賜物だった。欲しくもない経験だが、つちかわれた勘は告げている。

あの女は危険だ、と。
良い予想は当たることはないが、悪い予想だけは百発百中である。真昼だというのに薄暗い路地は空気が淀んでいて、今にも暗がりから何かが飛び出してくる強迫観念が脳裏をよぎる。
数斗は足を止める。
強迫観念ではない。
確信である。
何かがいる。
擦り切れた革靴を音もなく引き、ビル裏の暗がりに目を向ける。
今、来た道を戻れば、あの女が居るだろう。
だが、ここをただ通り過ぎるには恐ろしく労力がかかる。
数瞬の逡巡の末、数斗は足を前に踏み出す。甲高く革靴を打ち鳴らし、ふいに歩を速める。
一足飛びにビルの陰に入り込んで、暗闇に同化する。
黒の服のせいではない。文字通り同化するのだ。数斗が持っている数少ない特技のうちの一つだった。
五感だけを生かして、自分と入れ替わりでビルの陰から飛び出してきた人影を見遣る。
白いワンピースを着た少女だった。年頃は十二、三歳ほどだろうか。人形のような横顔は微動だにしない。肩までの黒髪をなびかせて、漆黒の瞳で正面の一点を見つめている。
その少女の前に、一人のバイザーをかけた男が立った。夏だというのに皮のジャケットを羽織っている。見ている者に暑苦しい印象を与えるが、色白の辛気臭い顔には汗一つない。男は、かけていたバイザーを外す。漆黒のオールバックとは対象的に眼が赤い。血走っているのかと思えば、そうではない。瞳が禍々しい暁のような赤色なのだ。
相対する二人は一言も交わすことをせず、無言のまま身構えた。
少女が動いた。白い指先が空を掻くと、何と彼女の背中が膨れ上がる。骨の折れるような嫌な音と共にワンピースが背中から裂けた。

同時に少女の二の腕は丸太のように膨張し、無表情な顔は鼻から先に突き出す。全身に白銀の毛が噴出して、少女の手は五本指の獣の手になった。
気がつけば、少女の姿はなく、ワンピースの残骸と抜け落ちた黒髪が二本足で立つ巨大な狼に踏みつけられている。
狼は二本の前足を地面につけ、改めて正面の赤眼の男を漆黒の瞳で睨み据えた。
白銀の巨体が伸縮性の富んだ体を引き絞り、男は身構えて眼を細めた。
同時である。
狼と男が路面を蹴った。
爪と牙が煌めいて、交差する。
白い影が男より先に降り立つと、すぐさま踵を返して、着地したばかりの男の背に向かう。
男は身を捻るが、方向を変えた狼に体当たりされて、あえなく壁に吹っ飛んだ。
狼は倒れた男を見下ろして、無情に牙を突き出す。しかし、次瞬にそれは阻止された。
轟音が降ってきたのである。
男と狼の間に突き立ったのは、誰が扱えるのかわからない二メートル近い巨剣だった。
誰もの物かと見回せば、剣の上から持ち主と思しき人影が剣の柄先に降り立った。
「いい加減にしな。弱い者イジメは正義の味方が許しちゃくれねぇぜ」
今時の子供向けヒーローでも言わないような台詞をニヤリと笑って言ってのけたのは、痩身の男だった。派手なシャツとジーパンの夏服にシルバーアクセサリーをこれでもかとつけ、わざわざ染めたような青の短髪は正義の味方というより悪役面である。
突然現れた闖入者に邪魔されたにも関わらず、狼は痩身の男に標

的を変えて牙を剥く。
派手な男は、足元の剣の柄に手をかける。そのまま右手一本で剣を引き抜いたかと思うと、狼に一歩も踏み出させないまま、その首に刃を突きつけている。
狼も、鈍色に似た刃を一瞥して、硬直した。
「終わりだ」
男は剣を振り上げる。
しかし、何を思ったのか剣を止めた。
「……何やってんだ？」
男が尋ねたのは、自分の後ろに倒れている男でもなく、目の前の狼でもない。
「……えー…と」
数斗は顔を引き攣らせて三人を振り返った。
騒動が片付きそうな合間を狙って、陰から出てきたのである。
この隙に逃げおおせようと。
三対の目に凝視されて、数斗は苦笑いする。
咄嗟に言い訳を考えるが、つじつまのあう理由をこじつけられず、乾いた笑いを漏らした。
「見つけたわよ！」
聞き覚えのある声が場に響く。
見遣れば、職安に置いてきたはずの女が息も乱さず立っている。
「その人を捕まえて！」
有無を言わさず、指を向けられて数斗はやけくそになって叫んだ。
「話を聞くから、待ってくれ！」

借家

差し出した水を、不思議そうに眺めて、少女はこちらを見返してきた。
彼女は先ほど、狼に変身した少女である。破れた白のワンピースの替わりに、今は黒のワンピースを着ている。
数斗は何と応えようか迷ったが、結局何も言わずに彼女の前に水のペットボトルを置いて、狭い机の端についた。四畳一間のアパートに図体のでかい大人三人と子供が一人入れば、充分だった。幸い、この部屋には机以外に家具はないので、誰かが立つハメにはならなかったが。
「すごい所に住んでるのね……」
瀬戸鞠と名乗った女が呆れた顔で薄汚れた部屋を見回した。
築四十五年の木造モルタルアパートだ。宅地開発の波にも負けず、しぶとく生き残っているのだから、もはや都会においては天然記念物である。
「水もないのか？」
少女に渡したものと同じミネラルウォーターのペットボトルを飲んでいた赤目の男はバイザーの奥の目を向けてきた。
「あいにく、水もガスも電気も止められていてね」
「その割に汚れてねぇな」
辺りを見回しながら言ったのは、青髪の男である。
「今でも銭湯やコインランドリーもあるし、飯だって食えるよ」
いい加減、生活質問に飽きて、数斗は女を見遣った。
「……それで、俺に話は？」
しばらく物珍しげに眺めて鞠はようやく数斗に向き直る。
「ええ。……ええと、何から話そうかしら…」
「始めに、話そうとしていたことから」
「そうね…。貴恵村さん。仕事をしてみない？」

「どんな？」
大きな不信感を抱きながら、つい問い返してしまうのは、職業難の苦渋をなめてきたフリーターの悲しい性質である。
心の悲鳴をおくびにも出さず、見返すと彼女はうっすらと笑んだ。
「あなたには良い仕事だと思うわよ。――…吸血鬼のあなたには」
数斗は目を細めた。
鞠は数斗の目の奥を探るように見つめてくる。
サングラスをかけてはいるが、この目は眩しすぎるほど明るく、この薄暗い部屋を映している。色の濃いサングラスも、黒に染めた髪も、本来の色を隠すためだ。血色の悪い肌は石膏のようで、きわめつけは、
「……出来損ないだけどな」
唇を押し上げると明らかに長い犬歯が鋭く伸びている。
見る者が見れば、一目で分かる吸血鬼の長い犬歯である。
「出来損ない？」
鞠が怪訝そうに尋ねるが、数斗は応えなかった。
「アンタ達も、人間じゃないみたいだが？」
四人は顔を見合わせたが、彼等も応えなかった。
「そうね。あなたも知っていると思うけれど、都心には私たちのような種族がたくさん暮らしているわ」
鞠はあえて種族と言ったが、いわゆる妖怪である。
古来、俗に化け物と呼ばれる類の者達は、山奥に暮らしていた。しかし、開発の憂き目に遭い、自然の動物達同じく、都心で暮らさなければならなくなったのだ。もちろん、山奥にしぶとく生き続けている者もいるが、大半は人間社会に進出するしかなかった。上手く人間社会に馴染んだ者は左うちわで暮らしていたり、普通に学校や会社に通っている。案外、隣人は化け物家族だった、ということも多いはずだ。そんな事実を知るのは、一部の人間と化け物達本人ぐらいしかいないのだが。
「でも最近になって、トラブルが頻発しているの」

ニュースで近頃取り上げられるようになった怪奇事件は、化け物達によるものが多い。
「そうなんだろうな」
適当に相槌を打っておく。話が怪しくなってきた。
「私達は、その事件を依頼によって解決するトラブルシューター会社なの」
「断る」
即答すると、鞠は瞬いて呻く。
「……どんな仕事か聞かないの？」
「聞けば、どんな目に遭うかわからないからな」
数斗は面倒臭そうに手を振った。
「俺はもうずっと平穏無事に暮らしてるんだ。今更、人助けするような仕事にはつけないよ。他を当たってくれ」

薄闇

夕闇の中、鞠はビルの間にひっそりと建つ木造アパートを振り返った。
「……案外、頑固者だったわね」
「ま、いいんじゃないの？　本人、あんなに嫌がってるわけだし」
「――スペクスト。彼をあなどってはいけないわ」
スペクスト、と呼ばれた青髪の男は巨剣を肩に担いでさっさと歩き始める。
「ただの吸血鬼なんだろ？」
「鞠の言うとおりだ。彼を軽く見てはならない」
一番後ろを歩いていたバイザーの男が神妙に口を開く。
「私たちがミヤコの捕獲に手間取っている間、彼は始終、陰からこちらの様子を見ていた。だが、私たちはそれに全く気がつかなかった」
「師範も教授も買いかぶり過ぎだっての。第一、それだけの技量しかなかったら、役に立たねぇだろ？」
スペクストは大きく伸びをする。
「危ない」
ずっと黙っていた少女、ミヤコがぽつりと漏らした。
「危ない……？　誰が？」
隣りを歩く鞠が尋ねると、ミヤコは漆黒の瞳を木造アパートに向ける。
「あそこ、危ない。悪いモノ、集まってくる」
四人は足を止め、古びた建物を静かに眺めた。

大通り

冗談じゃない。

何を今さら、危険なことに手を染めなければならないのか。

数斗は呟いて、客の帰った居間で暗くなった天井を眺めていた。

ここに住み始めたのはまだ一年と少しだった。

長くても十年ごとに住処を変えなくては、人間の大家に怪しまれるのである。しかし、近頃は安い物件も減少傾向にあり、十年も住める家さえ無くなりつつある。

人ではない者達にとって、食料問題と就職の次に問題なのが、住居である。少なくとも人の倍の寿命があるからだ。中には老いもない者もいて、長年同じ姿では気味悪がってすぐに追い出されてしまう。幸い、数斗の場合は最も懸案されるべき食料問題がない。食べ物の嗜好が限定されないのだ。

それでも、自分の生活に精一杯で、なかなか自殺もできない分、人間よりもタチが悪い。

「……他人の世話まで見てられるか」

正直な感想だった。結局のところ、余分に世話してやれるほどの財力も心の広さも持ち合わせがない。それだけのことだ。

窓が鳴った。

風かと寝ころんでいた頭をあげると、目にあらぬものが飛び込んできた。

一本の手である。窓の桟の辺りから青白い手がのびている。

それが部屋の奥にある唯一の安っぽい窓ガラスを手のひらで叩いている。

ここは、二階である。

音が増えた。

一つ、二つ、三つ……上下左右、八方から手が増えていく。

各々に呼び寄せるかの如くガラスを叩き、それはいつしか一つの

音となる。
部屋さえ揺るがす大音響になった時には、視界を埋め尽くすほどの手という手が窓ガラスを叩いている。
数斗はさすがに起きあがって、すぐ、部屋から出ようとしたが、妙な気配にそのまま動きを止めた。
だが、次瞬。
窓ガラスが反動に耐えきれず、砕け散った。同時に、木製のドアが何者かに蹴破られる。
二つの破片を避けて、部屋の中央に逃げた数斗は侵入者を自室に確認した。
それはスーツを着た中年の男、学生服の少女といった、人間だった。
中には小学生ほどの子供もいるが、いずれも白目をむいている。口をだらりと開け放ち、本来ならば出し得ない力を使ったためか、彼等の腕はいずれも血塗れになっていた。
血色の悪い幽鬼のように、彼等は奇声をあげて数斗に向かって襲いかかってくる。
数斗は最初に向かってきた中年の男の腕をとって、腹に肘鉄を食らわせる。
一人や二人であれば、いくら数斗であっても気絶させることができるが、雪崩れ込んでくる人数は十人や二十人ではきかない。
ふと思い至って、学生服の少女を捕まえて、羽交い締めにした。
首筋を確認して、顔をしかめる。
「……偏食吸血鬼か」
深く穿たれた二本の牙痕は青白く変色して、少女の鼓動と呼応して複雑にうねっている。吸血鬼に噛まれたこの傷口から呪をかけられて、死んでなお操られているのである。
異音を聞きつけて、少女から手を放した。
見遣れば、少女の口が真っ赤に裂けて醜い犬歯があり得ないスピードで生え替わっているのだ。他の人間達も同様に変化を起こして

いる。
ある者はコウモリのような翼を背中から生やし、ある者は鉤爪のような爪を伸ばす。
B級のホラー映画のような光景が次々と展開されていく。
一人が、何を思ったのか大きく奇声をあげた。すると、それに呼応して狭い部屋に集まった五十人ばかりの半妖怪達が一斉に応えた。
音波は建物に亀裂を生み、轟音と共に部屋ごと引き裂いた。
壁にへばりついて、様子を見守っていれば、部屋は屋根どころか一階まで分断されている。まるで巨人が屋根の上から狙って剣を振り下ろしたようになっている。
数斗はその隙間の屋根の部分に手をかけて、反動を利用して屋根上に這い上がる。
「俺は弁償できないからな！」
なおも追いすがってくるB級ホラーに言い置いて、数斗は屋根から暗い街路へ飛び降りた。
銭湯などが残る古い町並みは入り組んでいて、追っ手の姿は見えなくなる。
数斗は走る速度を緩めず、銭湯近くに未だ残っている電話ボックスに向かって、入り込んだ。
確か、と黒コートのポケットを探って出てきたのは一枚の紙片である。書いてあるのは、今朝、追いかけてきた（正確には数斗が一方的に逃げた）女の電話番号だ。勝手に机の上に置いていった紙切れをこんなところで使う羽目になるとは思ってみなかったが。
コートのポケットに十円玉を見つけて、受話器を取ってわずかな光源を頼りに電話番号を押す。コール三回ほどで反応があった。
『はい』
聞き覚えのある女の声だった。
「瀬戸さんか？　貴恵村だ。アンタ、新しい死人形（グール）に覚えはないか？」
質問したところで、電話ボックスのガラスが殴られた。見遣れば、

追いかけてきたと思しき青白い顔の男がへばりついている。
『死人形？　まさか襲われているの？』
「察しが良くて助かる。部屋が壊された」
再び轟音。電話ボックスに次々と追っ手達が取り付いているのだ。
『今、何処？　すぐ助けを……』
「それより。死人形に心当たりはないんだな？」
『とにかくそこを動かないで。助けを寄越すわ』
何か知っているらしい。だが、十円玉一枚で聞き出せるほど単純でもないようだ。
「間に合えばな」
すでにヒビの入った電話ボックスの中で、数斗は苦笑して電話を切った。
電話ボックスが壊されるのも時間の問題である。
白濁したヒビからガラスが落ちてきた。そこから長い爪の凶器が突っ込まれてくる。
「伏せなさい！」
くぐもった少女の声が聞こえてきた。
強力な光に促されて、数斗は身を屈めた。
次瞬。
電話ボックスの上半身が、無くなった。
焼けこげた匂いと共に、数十メートル先に飛ばされて、へばりついていた木偶人形共々ぐしゃりと潰れる。
数斗は即座にその場を逃げた。しかし、残っているのは電話ボックスの残骸だけで、あれほどしつこかった追っ手達が嘘のように消えている。
「グールなら、自分で何とかできたんじゃないの？　ミスタ・ヴァンパイア」
血臭と硝煙を洗い流した風の向こうから、一人の少女が現れた。
亜麻色の長い髪をなびかせて、身につけるのは、正月にしか見られないような朱袴の巫女装束である。意思の強い光を放つ灰色の瞳は

十七、八歳ほどの大人びた容姿に幼さを残している。手にした日本刀は、どう見ても不似合いだった。
電灯の薄暗い光の中では幻のように見えた。
「……巫女？」
尋ねると、少女はかぶりをふる。
「ただのバイト。途中で呼び出されたの」
今時の少女らしく、やたらと派手なストラップのついた携帯電話を袖から取り出す。
「もう終わりだったから良かったけど。こんな格好でうろつく羽目になっちゃった」
彼女はさも数斗のせいだと言わんばかりに不機嫌に溜息をついた。
「それはわざわざ、どうもありがとう」
数斗はコートのポケットからライターと煙草を取り出した。
「その格好で帰るのが嫌ならコート貸すけど」
「冗談やめてよ！　どこのバカが真夏の暑苦しい夜にそんなコート来て歩くの？」
顔をしかめて手を振る少女を横目に、煙草をくわえてその先に火をつける。紫煙が電灯のない暗闇に吸い込まれて消えた。
「アンタが新しいメンバーなんでしょ？」
「違うよ」
何処かにメールを打ち始めた少女を見遣りながら、数斗は肩を竦めてみせた。
「だって、全身真っ黒のグラサン男がメンバーになるって、教授からメールあったのよ。あんたがキエムラカズトなんでしょ？」
数斗はうんざりと明後日の方向に目をやった。
「教授も鞠さんもあんた気に入ってるみたいだし。あたしは別にどうでもいいけどね」
「君は人間だろ」
今日会ったのは、いずれも人間ではない。彼等の言う、“メンバー”には人間もいるらしい。

「退魔師。の家系らしいわ」
そう言って、少女は日本刀を鞘に収める。
「家系？」
「そ。小さい頃から日本刀振り回してたんだけど、詳しいことは知らないの」
危険な家系である。恐らく、あの刀であれば、丸太一本ぐらい軽く切断できるはずだ。
ゆっくりと少女の隣にやってきた車が止まった。左ハンドルの外車だ。数斗には車種までは判断できなかった。
窓が緩慢に開くと、助手席の女が顔を出した。瀬戸鞠だ。
「二人とも、乗って」
少女はさっさと後部座席に乗り込むが、数斗は首を振る。
「いや、俺は……」
「この状況が警察に説明できるなら残ればぁ？」
車の中から少女の声が聞こえてきた。
電話ボックスやアパートが真っ二つになってしまった現象をどう説明しろというのだ。
数斗は釈然としないまま、車に乗った。

道路

ネオンサインの洪水が騒音と共に襲ってくる。しかし、車内は静かなもので、ただ一人の話声が明瞭に聞こえた。
「心当たりはないの？」
「ない。アンタ達ぐらいかな」
応えると鞠は苦笑した。
彼女は助手席に座っており、運転しているのは寡黙そうなスポーツ刈りの大男だった。着込んでいるスーツがいかにも窮屈に見える。
隣に座っている少女は暇そうに窓の外の夜景を眺めている。
「アンタ達には心当たりがありそうだな。瀬戸サン」
死人形は意思のない動く死人のことで、グールとも呼ばれている。普通、吸血鬼が殺した人間につける呪術の一種ではあるが、妖怪であれば大抵、扱うことができる。
そんなものに未だかつて襲われたこともない数斗が大量のグールに襲われる羽目になったのは、鞠達が家を出てからのことだ。
「……ええ。でも、まさか貴方の所にグールを送ってくるなんて……」
彼女達にも意外な事態だったらしい。
「案外、もうメンバーだとか思われてたりして」
からかい調子に少女が笑う。
「……冗談じゃないぞ……」
低く呻くが、メンバーとやらと間違えられたと考えるのが自然だ。
「どうしてそう嫌がるわけ？　とりあえず、衣食住は保障されるのよ。給料だって出るし」
「そういう問題じゃない」
衣食住は人間として生きていくのに必要だが、化け物として生きていくなら本当は必要ないのである。
少女はムッと顔を歪めて、苛立ったように顔を背けた。女は取り

繕うように苦笑する。
「とにかく、私たちと一緒に来て。身の安全は保障するわ」
「……どうだか」
「バカにしないでよ！」
女の代わりに怒鳴ったのは、顔を背けていた少女だ。幼い顔に朱を上らせて、数斗を睨みつけてくる。
「吸血鬼だか何だか知らないけど、お姉ちゃんが結界張ってるから下手な妖怪は近寄れないわ！　アンタなんか、私と一緒じゃなきゃこの車にも乗れなかったのよ？」
甲高い声を向けられて、軽い頭痛に数斗はこめかみを指でほぐした。
「何だ。姉さんがいるのか」
意外なことを聞かれたとでも言うように、少女は目をしばたたいた。
「……それがどうしたのよ」
「なら教えてもらえよ。その日本刀の振り回し方。電話ボックスごとぶった切るようじゃ、一人前じゃないんだろ」
退魔師は、魔物のみを斬れるようになって一人前なのだ。破壊活動ならば、誰にでもできる。
「なっ……！」
「そこのあたりにしておきなさい。朝香。静世の優秀さは彼もわかってくれるわ」
フォローになってない。しかし、少女は鞠にたしなめられたと思ったのか口をつぐんだ。
「貴恵村さん。あなたも、悪いけど監視させてもらうわ」
「だったら、アンタ達の心当たりとやらを俺も聞かせてもらう権利ができたな」
既にネオンサインを追い越して、辺りは暗い外灯が等間隔で並んでいるだけだ。車は郊外へ向かっているらしい。
「――一年ほど前から、私たちは一人の吸血鬼を追っているの」

※

世界的規模で妖怪に関するトラブルを請け負っている会社があるという。
名前は一貫せず、時にオカルト組織と入り交じってしまうようだが、キリスト教会の悪魔払いとも一線を画す営利団体である。
魔女裁判などの宗教的弾圧から逃れた古今東西の退魔師達を集め、人間社会への進出を余儀なくされた妖怪達の保護を主な活動としているが、時に起こるトラブルも解消している。
トラブルを専門に処理する異能力者達は、特にＳ・Ｓ・Ｃと呼ばれている。
その彼等が一年前から行方を捜している吸血鬼がいる。
その吸血鬼の存在が知られたのは一年前の春。フランスで起こった大量殺人事件だった。殺された者はすべて血を抜かれているという残忍な手口は、すぐにＳ・Ｓ・Ｃに届けられ、捜査が開始された。しかし、これだけ派手に動いているというのに消息は一向に知れず、次にイギリス、ロンドン郊外でも同じ手口の殺人事件が起こった。このときは殺されたと思しき十人の遺体が犯人と共に消え失せた。それから、エジプトで二百人、インド七十五人の殺人事件が確認され、三ヶ月前に中国で百人が殺された。
そして、一週間前、日本で一人の女性が殺された。
マンションの一室で大量の血痕と共に無惨な姿が、尋ねてきた隣人によって発見されたのである。それから日に数度、同じような事件がニュースに流れるようになる。
ある者は血を抜かれ、ある者は大量の血液を残して消え失せる。
ニュースだけを集めても、すでに五十人以上が何の前触れも無く消えている。普通の失踪も考慮するならば、百人は超える可能性がある。
「居場所は全くわからない。でも、エジプトで捕獲したグールから、名前だけは判ったの」
モードレッド。

それは知られた名だった。
元は十七世紀、魔女裁判に率先して参加していた裁判官だったという。
彼は神の御名の下、大義名分を掲げて密告された女達を片端から拷問にかけて殺していった名誉を湛えられ、男爵の地位まで手に入れている。
この時期の裁判官はむしろ死刑執行人である。
元来、魔に憑かれやすい性質だったのか。彼は五十を過ぎた頃から裁判官であることを利用し、自ら黒魔術に手を染めた。彼の研究は“永遠の命”。その頃、誰もが欲した人間の永遠のテーマであり、決して叶わない夢であった。
だが、彼は手に入れた。
百人の女を生け贄に、怪物を喚びだしたのである。
その地に眠っていた吸血鬼を。
彼は吸血鬼に“血の洗礼”を果たさせ、吸血鬼へと堕ちた。
ここまでならば、幾らでも転がっている話なのだが、この後がモードレッドたる所以である。
彼は、自分を吸血鬼にした第二の親とも言える吸血鬼を喰った（・・・）のである。
その身を喰らい、血をすすり、主従関係を丸ごと胃に収めてしまった。
以来、彼は同族殺しとして畏怖とともに一目置かれる存在になった。

※

ヘッドライトの光だけが暗闇を引き裂いている。山奥の遠くには稜線が見えるものの、半月の月光では薄暗く浮かぶ程度である。
「じゃぁ、俺を襲った死人形はモードレッドの？」
「私たちが把握している吸血鬼の中でなら、十中八九はモードレッドのグールでしょうね」
鞠はヘッドライトの先を見つめたまま、肩を竦めた。

「どうして貴方が狙われたかはわからないけれど」
「それは、マイスターに聞かなければならない」
今まで喋ることがなかった運転席の男が、低い声で呟いた。
「そうね。マイスターなら何かが判るかも知れないわ」
「マイスター？」
尋ねると、鞠がバックミラー越しに笑んだ。
「貴方をメンバーに推薦された方よ。お知り合いだって聞いたけれど、心当たりはない？」
数斗は顔をしかめた。
「――……言いたくない」
心当たりはあるが、言葉に出すと本当になってしまう。悪い予感だけは当たるのだ。
「それより。あの明るい所がアンタ達の本拠地？」
右手に見える微かにしか見えないはずの稜線を一カ所だけが明るく夜空を焦がしている。
「そんな……！」
鞠は慌てた様子で窓にへばりついた。
「メネッセ！　急いで！」
悲鳴に似た声に応えて、メネッセと呼ばれた運転席の大男はスピードを上げた。

境内

山頂近い山林の奥に、古びた階段がある。石造りの鳥居は高い木々に抗して高く、一抱え以上もある構えである。火を点していたらしい石灯篭はことごとく壊されて、長い階段の脇に残骸が散乱している。

そう、昔に壊されたわけではない。

この石灯篭に頭を突っ込んで動かない人間も倒れているのだ。

その人間というのも、ただの人ではない。狩衣を着た牛頭の人間である。

鞠とメネッセ、続いて少女は階段を駆け上がっていってしまったが、数斗は階段や石灯篭を一つ一つ確認しながら登っている。

苔むしている階段は見た目とは違い、石切に切り取られたばかりのように直角を保っている。それがすでに百段以上続いているのだ。

ようやく狛犬が見えてきた頃には、大破した本殿が明るい炎に包まれて燃え尽きようとしているところだった。

境内は意外なほど広かった。磨き上げられたような正方形の飛び入りが敷き詰められて、こんな状況でもなければ、神宮のように美しい神社だったのだろう。しかし、今はあちこちに人間や狼などが倒れ、清らかなはずの白砂は血と炎に染められている。

すでに本殿の火を消すことは諦めたのか、その周囲で神官や僧衣姿の人々が茫然と様子を見守っている。

数斗は桶の突っ込まれた手水場で手を洗い、コートからシワのよったハンカチを取り出した。

「……非常事態ってやつか」

他人事として、無責任に呟くと、いつのまに聞きつけたのか、昼間会った狼の少女が隣に立っていた。火事に巻き込まれたのか、黒のワンピースや白い顔は煤で汚れて傷だらけである。

「女が来た」

少女は何の感慨もない声でぽつりと言った。
「女？」
「蛇の女。貴方に会いたがっていた」
「……何の用だって？」
少女が漆黒の瞳を本殿から数斗に向けた。
「あまり驚かない」
「俺が？　あー…そういえば何でだろうな」
数斗は頭を掻く。こういう時こそ、驚いて狼狽えるべきなのだろうが、そういう要素を持っていないらしい。
少女は不思議そうに数斗を見ていたが、ふいに興味を無くしたらしく、本殿に視線を戻した。
「自分の主が貴方に会いたいと言っているから迎えにきた、と。でも貴方はまだ来ていなかったから、また迎えに来ると言っていた」
「……また、面倒くさいことを…」
「それが主従というものですわ」
別の女の声だった。
聞き覚えはない。
顧みると、一人の女が境内の中央に立っていた。
火事に見入っていた人々の視線を集めたのは、黒髪を一つに束ねたスーツ姿の、秘書風の女である。
眼鏡の奥の瞳は、禍々しい朱。
「これが、蛇女？」
隣で同じように対峙した少女に尋ねると、彼女は無言で頷いた。
「ミスター。お初にお目にかかります。わたくし、モードレッド卿の秘書を務めております、ハネイアと申します。どうぞお見知りおき下さいませ」
ハネイアと名乗った女は優雅に微笑むと、おもむろに手を差し出した。
「我が主、モードレッド様は貴方様とぜひお会いしたいと申しております。よろしければ、わたくしとお出でいただけませんか」

流暢な日本語ではあるが、何処か外国語なまりがある。
「悪いが、ここにも無理矢理連れてこられたんでね。これ以上、他人に付き合う理由がない」
数斗の答えを、ハネイアは聞き分けのない子供を宥めるように溜息混じりに受け止める。
「残念ですわ。手荒なことは嫌いなのですが」
言葉に反して歌を口ずさむが如く笑うと、差し出した手を、すいと天にかざす。
すると、彼女の前の空間が鏡を殴りつけた時のように凹んで、空気が収縮した。隙間から泳ぎ出てきたのは、一匹の大蜥蜴だった。炎を照らし出す鱗を翻し、地面に降り立つと太い尻尾を這わせて、大きく口を開いた。
赤い口が見えたのは一瞬。次瞬には、炎が吐き出された。
数斗は隣の少女を抱えて後ろに飛んだ。着地すると、少女を離してハネイアを見遣る。
「痴れ者が。サラマンダーに首輪をつけるなんて。リードごと燃やされるぞ」
ハネイアはゆったりと微笑んだ。
サラマンダーは欧州の山奥にいる炎の妖精である。妖精というと聞こえは優しいが、気に入らない物を全て燃やしつくす荒い気性の持ち主だ。
「御するリードがあればよいのですわ」
声に応じて、サラマンダーは再び火炎を吐き散らした。
数斗は飛び退く。しかし、その後ろに居た運の悪い人間がまともに火炎を浴びて吹き飛ばされた。
「ちょっと！　アンタのせいでとばっちり食うじゃない！」
叫んできたのは、日本刀の少女か。
「……無茶言うな」
呻くと、ハネイアが困り顔で細い指を頬に当てる。
「お友達もああ仰っていることですし、大人しくついてきていただ

けませんか？」
「嫌だね。これ以上、俺の状況を悪化させてたまるか」
数斗は飛び退いた低い姿勢のまま、顔をしかめた。
「――仕方がありませんわ」
サラマンダーが大きく口を開けた。明後日の方向に火炎がうねったと思えば、炎は大きく回転して、周囲三十メートルを取り囲んだ。
否応なく炎の円の中に取り込まれた数斗は、激しい爆炎に煽られる。
火の粉を嫌って立ち上がると、コートの端が焼け焦げた。
「……しょうがないな」
左手をハネイアの正面にかざす。
彼女の首めがけて伸ばした腕をゆっくりと伸縮させると、ハネイアの顔が強ばった。
「あ……」
ハネイアの吐息が漏れる。肺に溜まった二酸化炭素を辛うじて吐き出したのだ。
左手の親指は彼女の喉を捉えて、押しつぶす。
「……な、何を……」
醜く歪んでいくハネイアの表情を無感動に観察しながら、数斗は左手をちょうど、彼女の首と同じほどの形にとどめた。
「つまらないことで粋がるなよ？」
自分でも驚くほど低い声だった。
「……超能力者（サイキッカー）か……！」
念動力（テレパシー）は確かに数斗の特技の一つではあるが、教えてやる必要はない。
「詮索は寿命を縮めるぜ」
力を入れようとした神経が頭から冷えた。
文字通り。
突然、水が降ってきたのだ。豪雨どころではなく、プールの水をひっくり返したような洪水である。

一瞬、息がつまり、目の前が真っ暗になった。
押し流される形で念動力は断ち切れて、気がつけばずぶ濡れで境内に座り込んでいた。焦げ跡はあるものの、火炎は既に消えている。
同じ炎の中にいたハネイアも同様で、サラマンダーに至っては失神している。
半ば茫然としていたが、ハネイアは我に返った途端に数斗を睨みつけて空中へと飛び上がった。そのまま霞のように消え去って、あとには腹を天に向けて仰いでいる大蜥蜴だけが残った。
だが、大蜥蜴はしばらくすると自然発火し始めた。そして、灰の一欠片まで燃え尽きて消えた。
それを眺めていた数斗の視線を黒い雨が横切った。何事かと頭に手をやると、髪から黒い水が垂れている。髪を染めていたはずの染料が落ちてしまったらしい。
コート革靴も中まですっかり洗われて、新品同様に光っている。
数斗は溜息混じりに辺りを見回した。
「だ、大丈夫ですか？」
今にも泣きそうな顔で叫んだのは、炎のすぐ向こうにあったらしい手水場で腕を突っ込んでいる女だった。焦げ茶色のおかっぱで、大きめの碧眼の容貌は童顔だ。神社にいる他の人々とは違い、スカートにノースリーブのシャツという軽装である。
手水場に水を突っ込んでいるところを見ると、先程の洪水はこの女のお陰らしい。
「助かったよ」
いつの間にか本殿の火も消え失せている。周囲の森は夜の静けさを取り戻しつつあるようだ。
「……そ、そうですかぁ…」
女は脱力してその場に、半ば泣きながら座り込んだ。
「わ、私、とろくさいから、術の初動作が遅れてしまって。気がついたら皆さん、いらっしゃらないし。それで、とにかく火を消そうと思って呪文を唱えていたんですが…。……そういえば、あなたは

？」
今更、基本的な質問をしてくるあたり、相当慌てていたらしい。
「ただの被害者。アンタは？」
「あ、申し遅れました。私は、Ｓ・Ｓ・Ｃのカンミドリ…」
「静世姉！　大丈夫？」
ご丁寧に頭まで下げていた女に駆け寄ってきたのは、日本刀の少女である。彼女は水を浴びていないらしく、巫女装束は奇麗なものだ。
「あ、朝香？　いつ戻ったの？　無事で良かったわ」
「無事で良かった、じゃないわよ！　こんな無茶して！　あんなの助けたって一文の得にもならないわよ！」
あんなの、と指をさされた数斗は呆れて溜息をついた。
「それがアンタの姉さんか」
「アンタには関係な…」
「そうなんです。私、朝香の姉の静世です」
噛み付こうとした少女、朝香をのほほんと押さえつけて、女、静世は改めて頭を下げた。
「ごめんなさい。朝香はとっても良い子なんだけど、とっても気が強いの」
果たして良い子と気性が荒いことは並列できるのだろうか。
「何で謝るのよ！　こんな初対面の訳の分からないヤツに！」
「どうして？　初対面だから悪い人かどうかもわからないのに」
論点がずれていく。この姉にしてあの妹ありき、である。案の定、朝香は姉の論法に振り回されて唸り声をあげている。
「貴恵村さん。大丈夫？」
ようやく動き始めた人々の間から、鞠と狼の少女が顔を出した。顔を向けると、少し驚いて目を見開いた。
「とりあえずタオル持ってない？」
数斗は苦笑して頭を掻いた。

※

仄暗い一室である。
ベッドの隣にある背の高いランプスタンドのみが薄暗い部屋を影絵のように照らし出している。
セミダブルのベッドには乱れたシーツが一枚ある。その中で、もみ合うように互いの息をすり減らしている男女がいる。
女の白い腕が男の背中に絡みつき、男はされるがまま体を弄ぶ。快楽の悲鳴を上げていた女が狂喜に酔って息を弾ませる。だが、それは長すぎた。
狂喜の声は恐怖の声になり、女は男の真っ白い髪を細い指で掴み取った。
渾身の力で男の髪や腕を掴んで抵抗するが、女を抱きしめた男は首筋に顔を埋めたまま離れない。
やがて、女の指から力が抜け、白い髪から滑り落ちると、ようやく男は体を離した。
「……死んだか」
今まで苛烈なまでに抱き寄せていたはずの女を、ゴミでも投げ捨てるようにベッドに放り出す。
女は、男の脇で目を恐怖に見開いたまま、虚空を眺めて動かない。その首筋は二つの牙に穿たれて、白いシーツにどす黒い血が流れ始めていた。
「つまらない女だ。これまで何人の男と寝たのだか」
男は口の端についた血を無造作に拭った。女を見下ろし、酷薄な笑みを浮かべた男はまだ若い。三十路にも届かないだろう。若々しい容貌は精悍に引き締まり、それでいて気品さえ湛えている。肩を

少し過ぎたばかりの白髪は上品さを際だたせていた。しかし、切れ長の瞳は凶兆を促す赤い月のように、深い紅を湛えている。
「そうは思わないか？　ハネイア」
彼等以外、確かに居なかった部屋の片隅に、片膝を床についたスーツ姿の女が恭しく頭を下げている。
「御意に」
「どうかしたのか。ハネイア。いつものように微笑んではくれないのか？」
ハネイアは頭を下げたままだ。
「ああ、そうか。彼を連れてくることができなかったから、悔やんでいるんだね」
「……申し訳ありません。モードレッド様」
彼女の声はかすれていた。
男、モードレッドはゆっくりとベッドから立ち上がる。そして、ハネイアの首筋にそっと触れた。その白い首には薄暗い中でもわかるような真っ赤な手の痕がついている。
「かわいそうに……。私がお前を行かせたばっかりに」
「……モードレッド様」
ようやくハネイアは顔を上げた。
「まず私がご挨拶に行こう。ついてきてくれるね？」
「はい……！」
ハネイアは初めて嬉しそうに笑んだ。
「では、まず傷を癒しなさい」
ハネイアは一礼すると、そんなまま壁の中に消え失せた。
それを見送ってから、モードレッドはベッドに残していた女の死骸に目を遣る。
「恐ろしいね。彼は」
それきり、ランプスタンドにあった唯一の光源は消えた。

地下

放り込まれた風呂場から出ると、用意されていたのは温泉によくあるような浴衣だった。

山奥の、しかも地下居住区に連れてこられてまさか浴衣を着る羽目になろうと思わなかったが、これ以外に何もなく、まさかパンツ一枚でうろつくのはさすがに躊躇われたので慣れない浴衣を着てみることにした。

しかし、不格好である。裾が足りないのだ。それに髪の染料も抜け落ちて、サングラスも何処かに持っていかれてしまった。

「どうしたんですか。その格好」

脱衣所の手前にある洗濯機の前でばったり会った静世に開口一番にさっそく言われてしまったのだ。

「銀髪に金の目じゃ、本当に浴衣が似合いませんね」

髪は青みがかった銀色で、目は黄金色なのだ。おまけに血色の悪い顔は浴衣の白地よりも白かったりするので、よけいに似合わない。

わかってはいたが、何となく落ち込んだ横で、静世が持っていたのは見覚えのある黒い衣服だった。

「それは……？」

「貴恵村さんのですよ」

にこやかに応えた静世から引ったくると、確かに自分のものだった。サングラスもあるのかと思えば、出てきたのは煙草とライター、薄い財布とハンカチ、それに何処かの駅前でもらったポケットティッシュだけである。隣で難しい顔で洗剤の分量を眺めている静世から箱を取り上げて、彼女を部屋から追い出した。

「ええ？　困りますよ。お客様にそんなことまでさせたら私が怒られます」

「あとで一緒に怒られてあげるから」

古い考えなら古い考えと笑うがいい。女性に自分の下着まで洗濯

させる甲斐性も度胸もない。
数斗は改めて洗剤を入れて時間をセットし直した洗濯機に洗濯物を放り込んでから、スノコの上に座り込んだ。
ここは脱衣所の前の四畳はあるスペースである。ここに洗濯機や乾燥機、洗剤や、入浴剤、タオルなどがまとめておいてある。
「……地下、なんだよな」
思い返せば、不思議な場所なのだ。
神社の本殿が燃えてしまい、これからどうするのだろうと面白半分に見ていると、本殿奥の小さなドアに怪我人などが運ばれていく。やがて鞠に連れられて入ると、ちょっとしたエレベーターである。そして地下三階で降ろされて、そのまま風呂場に放り込まれたのだ。ふいに、洗濯部屋の戸が開いた。
「アンタねぇ！　静世姉を追い出すなんてどういう了見よ！」
亜麻色の髪をはためかせて怒鳴り込んできた朝香は、巫女装束ではなく、ブーツカットパンツに腹の見え隠れするTシャツを着ている。
だが、数斗が目を丸くする前に、彼女が大声をあげた。
「アンタ、誰よ！」
もっとも単純な質問に、数斗は頭を抱えた。
「何を言ってるの。朝香。貴恵村さんよ」
追い出したはずの静世が天の使いに思えたのは錯覚だろうか。
「ええ？　だって、銀髪よ？　金色よ？」
まだ不信げな朝香を無視して、静世はまた馬鹿丁寧に頭をさげる。
「ごめんなさい。貴恵村さん。そんな浴衣しかなくって。ねぇ、朝香。やっぱりメネちゃんのお洋服、借りた方がいいんじゃないかしら」
「メネちゃん……？」
訝しんで尋ねると、静世はさも当然のように応えてくれた。
「ええ。あら？　お会いしなかったかしら。今日、あなたをここまで連れてきた運転手の」

あの巨漢か。確かメネッセと呼ばれていた。
「メネッセ！　何度言えばその呼び方やめてくれるの？」
朝香はまた論点をずらされている。
「だって、メネッセさんだと言いにくいんだもの。メネちゃんもメネちゃんで良いって言ってくれたし」
「それはメネッセが居眠りしてたときに聞いたからでしょ！」
会社にも色々あるようだ。
数斗はいい加減、姉妹漫才に飽きて二人に声をかける。
「俺に用があったんじゃないの？」
「あ」
さすがに二人同時にこちらを見遣った。何かあったようだ。
「師範と教授がお待ちかねよ。ついてきて」
朝香が部屋を出ようとする。だが、静世がまた蒸し返した。
「でもね、朝香。貴恵村さんをこの格好でつれていけないわよ。さすがに鞠ちゃんとユンちゃんを笑わせちゃまずいわ」
言外に、数斗の格好はおかしいと酷評しているのだが、静世は真剣である。
「メネちゃんじゃなくても、スーちゃんとかユンちゃんのお洋服を借りてきてあげましょうよ。このままじゃ貴恵村さんがかわいそうよ」
「あのねぇ。静世姉さん……」
朝香のこめかみに青筋が浮いたように見えたのは錯覚ではないだろう。
「メネッセは事後処理だし、スペクストは偵察よ？　教授は今後の計画を立てるのに忙しいし、みんなそんな暇はないの」
「でも、私達は暇よ？」
「暇じゃなぁいっ！」
――そうこうしている内に乾燥まで終わったので、数斗は結局、自分の服で部屋を後にした。

※

地下五階まで更に降りた先に、十人ほどなら楽に座れるようなソファとサイドテーブルが置いてある広間があった。そこに朝香や静世を始めとする昨日今日で知り合った人々が座している。

コーヒーを注いでもらったカップを受け取って、数斗は空いていたソファの一人席に座った。

そのために、否応なく視線を集める羽目になった。妖怪の世界は広いといえども、金色の目に銀色の髪は珍しいのだ。

「ようこそ。貴恵村数斗さん」

そう口火を切ったのは、一番中央に座した少年だった。

金髪の少年はいかにも金持ちの子息のような品のよい子供用のスーツに身を包んでいる。だが、その口調もさることながら、漆黒の瞳は子供では持ち得ない老成した輝きを持っている。更に、落ち着き払った笑みを向けられれば、目の前にいるのが本当に子供かどうかを疑いたくなる。

「私はアキラと申します。普段は、マイスターなどとも呼ばれていますが」

違和感のない動作で手を差し出されて、数斗の方がぎこちなく握手した。

「貴方のことは、常々、グランドマスターからお聞きしていますよ」

そのグランドマスターが誰なのかが気になるところだが、数斗はあえて聞かずにおいた。

どうせ、ろくでもないことが待っている。

この悲観主義という性質は治せるものではないらしい。

「今回は、面倒なことに巻き込まれてしまいましたね。彼の目的は、どうやら貴方であるとか」

「……何だか気持ち悪い言い方は止めて下さい」

数斗は不快感も顕わに顔をしかめる。変態とつむる趣味はない。

「どういう経緯で、貴方の存在を彼が知ることになったかはわかり

ませんが、微力ながら我々は貴方をお守りしようと思います」
「それは、有り難いのですが……」
「しかし、我々も福祉団体ではありません」
「……はぁ……？」
我ながら気の抜けた返事をかえして、怪しくなってきたアキラの話の行方を探る。
「ですから、報酬代わりにここで一ヶ月働いていただくということで手を打ちませんか」
「は？」
不信感が跳ね上がった。怪訝に顔をしかめるが、営業スマイルで武装したアキラは眉一つ動かさない。
「もちろん。衣食住は保障しましょう。わずかながら給料も。ですから、ここで一ヶ月働いて下さい」
つまり、こういうことである。
守ってやる代わりに、ここで働け、というのだ。
「そんなっ無茶苦茶な…！」
「どうしてです？　世の中は全てギブアンドテイク。持ちつ持たれつで上手く動いているのですよ？　弱肉強食の理論です。さ、ミヤコ。彼をお部屋にご案内しなさい」
「はい。お父様」
どう見ても同じ年頃の少年に向かって狼の少女、ミヤコは素直に頷いた。汚れた黒のワンピースではなく、すでに小綺麗な紫のワンピース姿である。
妖怪は見た目で年齢が判断できないものだが、これだけ外見年齢が近い親子も珍しい。
しかし、それどころではない。
「どういう理屈でそんな交渉が成り立つんですか？」
「『汝、隣人を愛せよ』」
数斗は息を呑んだ。
少年は口の端を上げる。

「『されど、汝に隣人はなし』」
数斗は咄嗟に抗議しようとして、溜飲を下げた。
汝、隣人を愛せよ。
されど汝に隣人はなし。
この言葉を知っている者に、並の理論は通用しない。
何を言っても無駄だ。
「……わかりました」
見放してくれない運命というやつには、たまに熱い灸を据えてやる必要がある。
「働かせていただきましょう？」

個室

水しぶきを浴びて、数斗は顔をしかめた。
「また？」
「こっちが本職だろ」
対面キッチンを挟んで男二人が睨みあっている構図は妙なものである。
「あきらめろって。いざ働くと決めたらウチは人使い荒いぜ」
青髪の男はスペクストと名乗った。一週間ほど前からこの男と共に都心に出ては、依頼される仕事を片づけている。
「人間じゃないだろ」
スペクストは、巨人族の一族の末裔だと言った。末裔だけあって、見た目は人の形だが、その異常な怪力は受け継いでいるらしい。
「でも、アンタもさぁ。鳴り物入りでここに来たのにただの家政夫するなんて思ってなかっただろ？」
「……これは性分だよ」
数斗は洗い終わった鍋を水切り場に置いた。皿は食器洗い機という文明の機器があるので洗わなくて良いのだが、鍋ばかりはそうもいかない。
「教授も言ってただろ？　アンタは特別だって。だから、そんなことしなくてもいいってさ」
スペクストはどうでもよさそうに、対面キッチンに張り出したカウンターにもたれかかる。
教授とは、ユエ・ブライトという赤目の吸血鬼だ。名前に似合わない青白い顔の痩身の男である。
紹介されて、似合わない名前だと感想を述べると自分もそう思っていると返した肝の図太い男だ。
スペクストは、面と向かって教授に似合わない名前だと告げたのはお前が初めてだ、と数斗を面白がった。

「今日の仕事は？」
「アンタのお仲間の捕獲」
エプロンを外してキッチンから出ると、スペクストは急かすように愛用の巨剣を肩に担いだ。
「ケンカの仲裁だけじゃないんだな」
二日前まで主な仕事は種族の違う妖怪同士のケンカの仲裁だった。昨日に至っては狼族の女と猫族の男の夫婦喧嘩だった。夫婦喧嘩は犬も食わないのは、人間も妖怪も同じである。馬鹿馬鹿しくなった数斗はちょうど一緒に行っていたメネッセに事後処理を押しつけた。
元来、無口な鬼族の男である。帰ってきた彼はひどく憔悴していた。
「まぁな。近頃じゃ、ちょっと人を殺しまくってる吸血鬼の捕獲ってのはなかなか無いから」
ダイニングルームを出ると、少女が一人、廊下の壁にもたれて顔をしかめていた。
退魔師の家系だと名乗った少女、朝香だった。
今日はジーパンにフリルのついたシャツ姿だ。スニーカーのかかとを鳴らして、こちらに振り向くと細く描いた眉を吊り上げる。
「おそい！」
「……待たせたつもりはないけど……。彼女も一緒に行くの」
後ろから出てきたスペクストに尋ねると、彼は今さら思い出したように頷いた。
「そういえば」
「今日の天気予報が当たったみたいな相槌打たないで！　私、夏休みだからしばらくここでバイトするって言ったでしょ？」
午後にほど近いが、朝から耳に反響する声は耐えがたいものがある。
「……あー…。ああ」
しばらく視線を空中にさまよわせていたスペクストはポンと手の

ひらの代わりに剣の腹を軽く叩いた。
「……。静世姉さんが今日は風邪ひいて出られないから、代わりにアタシがアンタ達につくことになったの。いい？」
朝香の姉も退魔師である。朝香とは違った意味でパワフルな女性だ。
「オーケー。オーケー」
クーラーがきいているはずの廊下で今にも倒れそうなほど顔を赤くしている朝香に、スペクストはおざなりに頷く。
「今日はそれなりに危ないから、自分が危なくないように気をつけてくれてさえいればいいさ」
「何よそれ！」
「うわ」
うっかり耳から手のひらを離してしまったので、甲高い声が鼓膜を貫いた。
それを朝香は見逃してくれず、殊更大きな声を数斗に向けてくれる。
「三人一組でチームなの！　足手まといが増えるとでも言うの！」
「言いません！」
負けじと大声で応えながら横目で見遣ると、今度はスペクストが指で耳栓をしていた。
「何よ。今日も暑苦しい格好のくせに。もらった服はどうしたの？」
スペクストは夏らしいTシャツとジーパンだが、数斗はいつものサングラスに、秋に着るような黒いセーターとスラックスである。綿のセーターは羊毛より重いが見た目にも重い。
「太陽の光は暑さより嫌いでね」
吸血鬼の弱点は基本的にない。一般に太陽のような強い光と十字架やニンニクや聖水と言われているが、それが全てではない。信仰心のある吸血鬼になら十字架などでそれなりにダメージを受けるのだろうが、全ての吸血鬼にキリスト教の信仰を求められても、それは応えようがない。第一、吸血鬼はキリスト教ができる以前から生

きている。銀という金属だけが吸血鬼の体を化学反応によって溶かすというが、実際に試した例は聞いたことがない。陽光の場合は、ただの性質である。

「元々、夜行性だから太陽が嫌いなんだ」

吸血鬼とは、実は異常能力を身につけた人間と大差ない存在なのだ。

「吸血鬼っていうから、もうちょっと悲劇的な理由を期待してたのに」

「一皮剥けば、何だって期待はずれするものだよ」

三人は廊下の突き当たりにあるエレベーターに乗った。

ここは、あの神殿地下である。居住区の地下三階の一角に部屋をもらって約一週間が経とうとしていた。その間に、壊されたアパートの大家さんに弁解と弁償金を支払いに（この資金はアキラから出資してもらった）行ったり、家事を押しつけられたりしていたが、日々の仕事は、この三人一組のトラブルシューターである。

仕事は妖怪達によるトラブルの仲裁が多いが、中にはこうしてハンティングまがいの仕事もある。このような仕事は、妖怪と人間のメンバーでチームを組んで行うという。

「術の中には、妖怪にしか効かない術と、人間にしか効かない術があるから」

朝香が面倒くさそうに応えたが、理由はそれだけではないだろう。妖怪は妖怪の特性を熟知しているし、人間は妖怪の殺し方を熟知している。この異種族達が集まることによって、もしも妖怪を排除しなければならない事態になれば、確実に排除できるよう考慮されているのだ。それだけに、この妖怪専門のトラブルシューターは優秀な仲裁者であると同時に、優秀な殺し屋集団としても知られている。中には同族殺しと呼ぶ者もいる。

エレベーターが到着を告げた。

地下から地上に降り立つと、まるで異世界に迷い込んだ錯覚を起こす。棺桶から追い出されてしまった死者のように。

※

「サットをカゴの中に…？」
スペクストから渡された薄っぺらい司令書をつまんで、朝香は怪訝な声をあげた。
「Ｓｏｔは酔っぱらい。だから酔っぱらいを捕まえろってこと」
「それぐらい分かるわよ。だけど、酔っぱらいが誰かわからないでしょ！」
後部座席でくつろぎながら応えた数斗を助手席の朝香は怒鳴り飛ばして、頬を膨らませる。
その隣でこのミニバンを運転しているスペクストが大笑いした。
「な、何よぉ」
「そっか。朝香は初めてか。吸血鬼を捕まえるのは」
小一時間捕まっていた渋滞がようやく動き始めて、スペクストはギアを入れた。
「初めて？　今まで一度もない？」
驚いて声をあげると、助手席から朝香が睨みつけてくる。
「まぁまぁ。朝香はまだ若いんだから」
暗に世間知らずと言われて、朝香は黙り込んだ。
「……吸血鬼は、別に人の生き血をすすって生きているわけじゃないんだ」
数斗は動き出した車窓から、高いビル群を眺めて呟くように口を開いた。
「大抵は、植物や動物から生気をかすめ取って生きている。ある程度、長生きすれば仙人のように何も食べずに過ごすこともできるようになる」
「……アンタ、普通に三食食べてるじゃない」
「俺は混ざり者だから特別」
交雑種は人間との場合が多く、彼等は昼間でも平気で歩き、食物からエネルギーを得ることができる。
「血は、生きるために必要なものじゃない。あれは吸血鬼にとって度数の高い酒と同じなんだ」

「酒？」
「そう。血は生命の源、生気の源泉だ。調理もしない麦と同じか、スコッチの原液と同じ。だから、まっとうな吸血鬼なら百歳を超えるまで血は飲まない」
　ミニバンは表通りを右折し、裏通りに入った。薄暗い道では陽光の力も少し遮られる。
「というより、まともに飲めない。百歳までは、まだ血を分解する酵素が体の中に出来上がっていないから、上手く分解できずに蓄積する。
ちょうど、酒を飲み過ぎた二日酔いみたいになる」
「じゃぁ、血を飲むのは百歳を超えた吸血鬼だけ？」
「いや」
　ここが難しいところなのだ。
「百歳を超えると、ほとんどの吸血鬼は食事することを止める」
「……食べないの？」
「何も食べなくても生きていられるようになるから、面倒くさがって食べなくなる。だけど、百歳以下の吸血鬼は食べなければ飢えて死ぬ。だから血を好む吸血鬼のほとんどは百歳以下の若造だ」
「血を飲めば二日酔いになるんじゃないの？」
「不思議なことに、血……特に人間の血は麻薬の入った酒みたいなものでね。ひどい二日酔いの後に嘘のような覚醒があるんだ。でもそれは持続しなくて、今度は飲んだ後よりもひどい二日酔いになる。重症だとここで死ぬヤツもいる。内臓が破裂するような痛みと割れるような頭痛に耐えると、次に焼け付くような喉の渇きを覚える。それでまた血を飲むと一時的に苦痛が治まるから、結果的に血以外は胃が受け付けなくなる。百歳までこんな生活を続けていると、血を分解する酵素が普通より多いから、血に対する欲求が強くて押さえきれなくなる」
「……だから、モードレッドは大量殺人犯になった？」
「まぁ、そう考えるのが妥当じゃないか」

それきり朝香は黙り込んだ。
スペクストがミニバンを止めた。
「着いたぞ」
そこは都心のビル群の一角にある、古びた七階建てマンションの前だった。三十年ほどは経っている壁面はひび割れて所々剥がれ落ちている。
エレベーターはない。狭いエントランスホールは掃除されているものの、管理人室とプレートがはめ込まれた出窓はカーテンがかかったままで誰がいる様子もない。
階段で四階まで昇り、スペクストが一室の呼び鈴を鳴らす。
しかし応答はない。
数斗はなおも呼び鈴を鳴らそうとするスペクストに呼びかける。
「……やっぱり一人は下で待っていた方が良かったんじゃないか？」
「俺は突撃部隊だし、アンタは補佐。朝香は初めてだから残しておけない」
誰も残れないわけだ。
「俺だったらここからでも飛び降りられるしな」
四階とはいえ地上から十メートル以上あるのだが。尋ねるのも馬鹿馬鹿しいので、数斗は黙殺した。
しばらくしつこいほどスペクストは呼び鈴を鳴らしたが家主は一向に顔を出そうとしない。さすがにスペクストも口を引きつらせた。
「もしかして、夜歩きに備えて律儀に昼寝してるとか…？」
「さぁ？　でもこのままじゃ仕事にならないぞ」
「困るねぇ」
スペクストは軽く溜息をつくと、ドアノブを掴む。そして無造作にノブを引いた。
ドアは批難の悲鳴を上げて、玩具が壊れるように無残に一瞬で引きはがされた。
その途端、辺りに異様な臭いが満ちた。鉄錆のような、それでいて生臭い異臭である。

「……血の臭いだ」
数斗は鼻を押さえて顔をしかめた。血の臭いは毒なのだ。
惑わされる。
スペクストはドアを壁に立てかけて、部屋に土足で踏み込んだ。
続いて朝香が、そして数斗もそれに続いた。
短い廊下を進むにつれて濃くなっていく血臭を堪えて、視界に入れたのはツートンカラーの部屋だった。
何処もかしこも、白いシーツで覆われているのだ。六畳二間にダイニングキッチンがついた部屋である。その部屋全てに真っ白いシーツが張り巡らされ、シーツには黒みがかった赤が世界地図のように染みついている。
朝香がシーツの端を掴んでいる。
その腕を掴んだ。
「何？」
「……止めた方がいい」
興味本位では見ていけない。
「スペクスト」
彼の手がシーツを握りしめた。
制止する間もない。
ツートンカラーのシーツは跳ね上がる。
風に舞い上がった布の下から、一人の男が起きあがる。
辛うじて近くにいた朝香を何もない玄関に突き飛ばす。怒鳴り声が聞こえてきたが、むせかえるような血臭に、やがて何も聞こえなくなった。
安っぽいソファとサイドテーブルが姿を現した。しかし、それだけではない。
スペクストは玄関に続く廊下の口に立ち塞がって、ソファとシーツの間から立ち上がる男を凝視する。
冬用のジャケットを羽織った三十代ほどの男だった。青白い顔をうつむけたまま、焦点もあわないのかふらついている。

吸血鬼にとって、こんな場所で眠るのは自殺行為だ。
こんな、死体のばらまかれた場所で。
否応なく視界に入ってくるのは、女の腕や足。それ以上は錆び付いた血にまみれて見えない。
男はぼんやりと顔をあげる。急激に焦点をあわせ、こちらを睨む。
「……アンタたちは」
「――S・S・Cだ」
スペクストの声に、男は形相を歪めた。
血塗れの床を蹴る。
ソファの端を足がかりに、スペクストに向かって腕を突き出す。
すると爪が異常な速度で伸びてすぐさまスペクストの首筋に迫った。
しかし、背負っていた愛剣を引き抜いたスペクストにへし折られて、男はそのまま横殴りに蹴り飛ばされる。リビングと同じように死体置き場になっている隣の部屋に首から突っ込んだ。
男は動きが鈍っているようだった。
「酔っ払ってる」
告げるとスペクストも頷く。
男は血を飲み過ぎて、昼に動けなくなっている。血は、吸血鬼本来の性質を強くするため、夜にしかまともに動けなくなるのだ。
「数斗」
スペクストは改めて巨剣を構えた。
「朝香を連れて外に出てろ」
「そうさせてもらう」
血臭に酔いそうだ。
数斗は玄関先で立ち往生していた朝香を連れて部屋を出る。
「スペクストは？」
腕を引かれて階段を降りながら、朝香は今出てきた部屋を顧みる。
「後で来る」
昼の日差しがマンションに入った時よりも強くなった気がする。
しかし、それは錯覚だ。

酔いかけている。
「……ちょっと、いつもより顔色悪いわよ」
女の声。
腕に細い指が触れる。
目眩が頭痛を引き起こす。
数斗は朝香の腕を引いて、自分の前を走らせた。
「……先に」
不審な顔で彼女は見上げてくる。
ともすれば彼女の動脈を視線が探す。
「……マンションの外へ」
朝香はしばらくこちらを眺めていたが、やがて残りの階段を下っていった。
亜麻色の長い髪を見送らず、すぐ側の壁によりかかる。
古い記憶が目の奥から焼きついてくる。長い髪の女の影が、浮かんで、消える。
しかし、それは現実の異音にかき消された。
窓ガラスが盛大に割れる破裂音である。
目の前をガラスの破片が陽光を反射して通り過ぎていく。
階段の踊り場から外を覗くと、同時に落下物を見つけて顔をしかめる。
吸血鬼の男だ。四階から飛び出してきたらしい。それを追ってスペクストが派手な音と共に飛び降りてくる。
下には朝香が降りているはずだ。
数斗は舌打ちもそこそこに階段を駆け下りた。
階下からひどい轟音も響いてくる。
階段の先のエントランスホールを抜けて誰もいない管理人室を通り過ぎる。
外へ出ると、目立たないように止めたはずのミニバンが天井からひしゃげていた。十中八九、飛び降りてきた二人に踏みつぶされたのだ。

「……鞠に怒られるぞ」
低く呻いていると、ミニバンの反対方向から朝香が顔を出した。
彼女は片手に日本刀を携えている。
「スペクストがあっちに追っていったわ」
朝香はビル街の奥を指さして、日本刀を鞘に戻した。
「襲われた？」
「逆に袈裟切りにしてやろうと思ったけど、逃げられた」
たくましいものだ。
「どうする。この車」
嘘のように潰れたミニバンを指さすと、朝香は自分に責任は無いとでも言うように肩で息をついた。
「スペクストが引いて帰るんじゃない？」
どうやら潰したのはスペクストらしい。
「……とりあえず、行ってみるか」
一応は、スペクストが向かったビルの奥へ覗きに行ってみる必要がある。
数斗は朝香と連れだってビル街のさらに奥まった道を明るい入り口から眺める。
「スペクストー」
気のない呼びかけをしてみると、声が少し反響した。
「……数斗」
暗がりにスペクストの声と、Tシャツが見えた。
だが、暗闇から現れたスペクストの上半身は、仰向けに倒れ込んだ。
彼は目を見開いたまま、気絶している。
「スペクスト……！」
駆け寄ろうとした朝香の肩を数斗は掴んだ。
「何を…」
「誰だ」
朝香を無視してスペクストが倒れた正面を睨む。

靴音が響いた。
わざとらしく反射していく音はゆっくりと、しかし確実に近づいてくる。
白い影が閃いた。
揺れたのは、長いコートの裾である。歩調にあわせてなびいている。
うっすらと浮かび上がってくるのは白い髪の男だった。
精悍でありながら気品もそなえた容貌に、深い笑みを刻んでいる。肩より少し長い髪はわずかな風に揺らめいて淡い光を反射した。
一見、痩身に見えるその片腕には男が抱えられている。先程の吸血鬼の男だ。気を失っているのか死んでいるのか、男は糸の切れた操り人形のように動かない。
革靴から少し音をたてて、白い髪の男は数斗達から十メートルほどの所で立ち止まった。
こちらを眺めて穏和に微笑む。だが、人に寒気をもたらす笑みだ。男の紅玉のような目には、赤い水を湛えて計り知れない狂気が渦巻いている。
男は舞台役者のように優雅に一礼した。
「お初にお目にかかる。ミスタ・貴恵村」
名指しをされて良かったことは何もない。だが、こういう場合、黙っていると了承と取られてしまう。数斗は落ちつき払って応えた。
「人違いです」
朝香が呆れてこちらを見遣ったのがわかったが、とりあえず気がつかなかった顔をしておく。
男は微笑んだまま、表情を動かさなかった。
「それは失礼致しました」
大した根性だ。
「いや。それよりその男をどうしました？」
「ああ、この方ですか？」
男は自分が抱えた男を軽々と持ち上げる。

「私の知り合いでしてね。顔色が悪いので声をかけたら倒れてしまって」
見え透いた嘘である。男は明らかに意図的に気絶させられている。だが、虚言はこちらも同じだ。
「困りました。私達もその男に用があったのですが」
「あなたも、少し顔色がすぐれませんね」
男の瞳が鋭く光った。
数斗は朝香を下がらせた。
男が一歩踏み出してくる。
「血に、酔われましたか」
生臭い風が流れた。
暗闇が色を増す。
抱えられた男の首元から流れているものがある。
銀色の血だ。
男は、死んでいる。
「スペクスト！」
呼びかけるが彼は動かない。
「血の味をお忘れになられたか？」
舌打ち混じりにスペクストに駆け寄る。スペクストは完全に意識を失っているようだ。彼の体を抱え起こして、腕を肩に担ぐ。
「あなたともあろうお方が、血も飲まずに何をなさっておいでだ」
からかいと嘲笑を含んだ腐臭が正面に立ち塞がる。
白い髪の男が笑みを浮かべて立っているのだ。
「また改めて、ゆっくりとお話いたしましょう。あなたがご自分を取り戻されるように」
風が吹いた。
その一陣の風にさらわれて、白髪の男は幻のように消えた。
数斗はそれを見送らず、さっさとスペクストを抱えて朝香を顧みた。
彼女は顔をしかめている。

視線を向けると、珍しく目を逸らした。
霜のような沈黙が降りた。
声をかけようとしたが、静寂に負けて口を閉じる。
無言で暗がりから出ようとすると、制止するように声がかかった。
「血を飲んだことあるのね」
絞り出したような低い声だった。
侮蔑と畏怖が入り交じる、聞き慣れた声だった。
そして幾度となく問われた。
血を飲んだのか、と。
「吸血鬼ですから」
他に答えようがない。それが唯一の理由であり、全てなのだから。
歩き出すと、何故か朝香がついてきた。
無理をするなと言いかけて、機先を制された。
「さっきの白髪男の吸血鬼、血を飲んでた？」
思わず彼女の顔を見遣る。だが彼女はいつものように苛々と顔をしかめる。早く答えろというのだ。これ以上、へそを曲げられては敵わないので、さっさと応えることにした。
「多分、人間から吸血鬼になった半端者だから、主食は血だろうな」
「……同じ吸血鬼の血も飲むの？」
彼女も白髪の男に抱えられていた男が既に殺されていたことに気がついていたようだ。
「関係ないんだ。ああいう半端なヤツは、何の血でも飲めれば腹が満たされるから」
吸血鬼は、育ちで大きく食習慣が変わると言っていい。まともに育てられれば、血など飲まなくて良いのだが、血を飲めばいいと思っている吸血鬼は生涯、血を飲まずにはいられない。それは、半端者と呼ばれる洗礼を受けた者に多い。
「とりあえず」
数斗は改めて顔をひきしめる。
「どうやって帰るか、考えようか」

「……そうね」
さすがの朝香も素直に頷いた。

※

迎えが来たのは、レッカー車で車を道から運び出した後だった。すでに日は落ち、まだ白んでいる空の反対側から星々がわずかな光を放ち始めている。
「もう何台目かしら」
大きく溜息をついたのは鞠である。彼女がメネッセを連れて迎えにきたのである。その車は、ひどく目立つ車だった。後部座席が二つ、向かい合っているのだ。見たことも聞いたこともないような車にスペクスト共々乗せられて、数斗は居心地悪さから隅に座った。
「今度からもっと安い車をスペクストには運転させよう」
苦笑したのはアキラである。まだ目を覚まさないスペクストと朝香と並んで数斗が一つの後部座席に座しているが、少年が広い後部座席の真ん中に腰掛けている。その隣で人形のようにミヤコが付き従っている。
朝香も数斗も山奥に帰るだけの交通費を持っていなかった。不幸中の幸い、朝香が携帯電話を持っていたので鞠に連絡したのだ。しばらくすれば迎えに行くから、と待っているとレッカーが鞠の名前でやってきた。作業員に事情を話すと、やっぱりまだ待っておけと言われて今に至る。
やっと休めると安堵するが、まさかこんな車で来ようとは誰もおもうまい。案の定、都心の信号で立ち往生すれば否応なく注目を浴びている気配がする。気配だけで済んでいるのは、窓全てにカーテンが掛かっているためだ。
「その、白い髪の吸血鬼だけれど」
向かいのアキラとミヤコの隣に座している鞠が顔をしかめた。
「ああ。あの危ないの。瀬戸さんのお知り合い？」

「写真でならね」
鞠が手渡しきた書類のトップにピンぼけした写真がある。それは瞬間に撮ったものらしく、中央で何処かのホテルに入ろうとしている白髪の男以外、何かわからない。
「これを撮った人、この後どうなったか知りたくない？」
鞠が少し笑うので、朝香が苦笑いした。
「あまり知りたくないです。師範」
「そう？　残念だわ」
鞠は肩を竦めた。
「死んだ」
代わりに応えたのはミヤコだった。
「全身の血を抜かれて、川に浮いていた」
朝香が低く息を呑み込んだ。思わず声をあげかけたのだろう。
「まぁ、そういう男なんだよ。モードレッドという男は」
沈黙を更に重くするような名前を挙げて、アキラは笑みさえ含んで首を傾げる。
「だから、君たちが全員無事だった、というのはまるで奇跡だ。よかったら、どんなマジックを使ったか聞かせてもらえないかな」
「マジックって……」
朝香に横目で睨まれて、数斗は目をそらした。
「土左衛門作るのが趣味の変態は知り合いにいないよ」
「でも、アンタに会いにきたんでしょ？」
痛いところをついてくる。
「吸血鬼には里心みたいなものが強いってことはないのかな。あなたが昔、洗礼したとか」
「今まで一度も、“子供”を持った覚えはないよ」
「じゃぁ、弟とか」
「……聞く相手が違うと思うんだけど……。第一、洗礼は契約だから親子関係はあっても兄弟って意識はあるかどうか怪しい」
出生率の低い吸血鬼は、その人口を多種族に洗礼を受けさせること

によって保っている。“親”となる吸血鬼が自分で“子供”を決めて、自分の血を与える。吸血鬼の血は与えた者の体内に血を分解する酵素を植え付ける。洗礼を受けると、文字通り吸血鬼に生まれ変わるのだ。

「それもそうだね。吸血鬼は僕ら、狼族とは違って家族で行動しないから。質問を変えよう。あなたは何故、モードレッドが人間から吸血鬼になったと思ったんだ？」

「人間からの洗礼者が陥りやすいんだよ。血に酔うのは」

洗礼によって血の味を欲しがる者が多いのである。洗礼を受けた者も、根っからの吸血鬼もあまり差異はないのだが、血の味を覚えて堕落した者、特に洗礼を受けた者は半端者と呼ばれている。無論、洗礼を受けた者が全てそう呼ばれるわけではない。要は親の責任なのだ。

「吸血鬼の社会っていうのは、元々、貴族社会でね。実力がものを言うんだ。だから新参者は有力者の元で修行して実力をつけてから位階をもらう。それでやっと百年。だから幾ら血が欲しくても血なんか飲ませてもらえない。でも最近はいい加減によく考えもせず洗礼を施す痴れ者がいる」

「だから有名な家庭内害虫みたいに増えてるのね」

妙に納得したように朝香が頷くので、数斗はさすがに顔を歪めた。

「……それは身もフタもないんだけど…。体勢が変わってきているから。多分、人間の中からの洗礼者が増えたせいだろう」

「残念ながら、そういうことだろうな」

「……どういうこと？」

頷いたアキラを見遣って、朝香が不安そうに眉を歪めた。

「人間は自分が持っていないものに対しての欲が深い。どの妖怪だって、欲はある。でも、相対的に見て、人間の方が圧倒しているんだ」

「人間の方が欲深ってこと？」

「欲があることは悪いことじゃない。欲があるということは向上心

が強いことだ。向上心は発展を促す。だから、人間はどの種族よりも子孫を増やしてきた。他の種族を根絶やしにしながらね。それが生存競争だ。でも、その生存競争に吸血鬼は干渉した」
「共存するということは吸収しあうこと。だが、それには人間は欲が強すぎる。誤算だね」
アキラは冷笑した。今、吸血鬼達がもっとも後悔して、頭を痛めている問題なのだ。
「血は、飲めばその血の持ち主の力を得たような気分になる。実際、栄養になっているわけだから、力を吸収していると考えても間違いじゃない。だけど、若い吸血鬼、特に人間の洗礼者は血を力の源と思いこんでいる者がいる。それが一番の懸案だ」
「どういうことなの？」
「つまり、彼等の理屈から言うと力の強い者の血が欲しいんだ」
「だから？」
数斗は溜息をついた。馬鹿馬鹿しいことなのだ。自分で蒔いた種に、首を絞められているようなものだ。
「まず自分を吸血鬼にした“親”を殺して血を飲むんだよ」

「朝香。そんな面白いお話を聞いてきたの？　私も行けば良かったわ」
「夏風邪引くなんて静世姉が悪いのよ。お陰で死ぬかもしれなかったんだから」
「でも私が行っても、死ぬかもしれなかったわね。そっちの方が良かった？」
「そういうこと言ってるんじゃないの」
リビングでタオルをたたんでいる数斗の隣で繰り広げられる姉妹漫才はヒートアップしていく。その飛び火を避けるためにたたんだ洗濯物を持ってソファを立った。だが、やってきたユエに阻まれる。
「精が出ますね」
「そうなのよ。ユンちゃん。貴恵村さんってすごくマメなの。器用貧乏なのかしら」
矛先をこちらに向けた静世が身もフタもないことを言ってくれる。仕事の間に好きなことをしてよいと言われているが、特に趣味を持たない数斗は何となく自炊しているのだ。それにスペクストがまず便乗し、静世が風邪をこじらせて寝込み、朝香がバイトでやってきた。ついでに鞠やユエ、ミヤコが顔を出す。気がつけば、食事時には必ず台所に立っていたのだ。
ユエは苦笑しながら、ソファに残っていた洗濯物を糊の利いた長袖ワイシャツの腕に抱え上げた。数斗以外のメンバーの中では彼が一番、身奇麗でマメだ。数斗と同じようにバイザーで目を隠したこの男は今日も神経質なほど奇麗になでつけたオールバックである。
「これは何処へ？」
始めはこんなことは各自ですることだと渋い顔をしていたユエだが、ようやく趣味のない人間がいることが理解できたようだ。彼の場合、研究が趣味のようなものらしい。

「全部、洗濯部屋に。自分の服は勝手に取っていくから」
「あら。私も手伝うわ」
ふらふらと部屋着姿の静世が立ち上がろうとする。まだ熱があるのだ。
「アンタは寝てなさい。あとでリゾットと桃を持っていく」
静世は少しだけ目を瞬かせてから、珍しく素直に頷く。
「……はい」
応えだけ聞いて、リビングを出た。
「静世が、貴方にはやけに素直だ」
ドアの向こうに声が聞こえなくなってから、ユエは苦笑した。
「冗談じゃない。あの姉妹、俺を漫才でストレス死させる気だ」
廊下を横切り、幾つかのドアを通りすぎる。ここには、S・S・Cのメンバーしか住んでいない。部屋は一人一つずつ与えられていて、この階の部屋は静世や朝香など、女性陣の部屋がある。数斗やユエの部屋は上の階だ。
「あの姉妹は仲がとても良い。彼女達は両親を早くに亡くしていますから」
「じゃぁ、あの静世が親代わり？」
「彼女達は十歳にも満たない頃、ここに保護され、ここで育ちました。私たちが親のようなものでしょうか」
「どおりで、妖怪に抵抗がない。特に吸血鬼に」
ユエは青白い顔を緩めた。
この男にしては珍しいことだ。
「……全く抵抗がないわけではないのですよ。彼女達は両親を妖怪に殺されている」
よくあることだ。
「ご存じでしょう。退魔師は妖怪にひどく嫌われている。……彼女たちは目の前で両親を殺されたようです。だから、ここに来たときはひどいものだった」
「人間の人生は短いから。憎悪も持続しないんだ」

「うらやましい。そんな風に生きられたら、と思いますよ」
「意外とロマンチストだな。人間になりたいクチか」
人間の中に、妖怪になりたがる物好きがいるのと同じほど、妖怪の中にも人間になりたがる者がいる。理由は様々だが、大体は恋人と同じ種族になりたがるのだ。交雑種の問題は何処でも同じように問題となる。
「私はおかしいでしょうか」
そんなことを生真面目に聞いてくる奴が変わり者だ。数斗は思わず失笑した。
「長く生きるのは飽きるものだから。人間として生きてみるのも面白いだろうな」
今度はユエの方が笑い出した。
「貴方も変わり者だ」
「よく言われるよ」
刹那を鮮烈に生きてみたいというのは、妖怪の無い物ねだりだ。だから、せめて人間と関わって命の煌めきのようなものを目の当たりにしたい。そんな興味本位から人間社会に進出する妖怪は案外多い。住処の減少も社会進出の理由の一つではあるが、悠久の時を過ごす、一時の退屈しのぎなのだ。一瞬の人生をこれでもかというほど峻烈に生きる人間というものに出会ってしまったのだから。
「教授！」
ちょうど洗濯部屋に洗濯物を片づけて出てきたところで、甲高い声に呼びかけられた。
走り寄ってくるのは鞠である。いつもの上等なパンツスーツが今日は何処か着崩れて見えた。
「どうしたんだ、鞠」
彼女の慌てた様子につられたのか、ユエは表情を正す。
「た、大変なの……」
「あの」
数斗は話をとばっちりで聞く前に、口を挟んだ。

「俺はここに居た方がいいの？　用がないならキッチンに行くから」
冷や汗さえかいていた鞠の表情が少し緩んだ。
「できれば、ここに居て欲しいわ」
巻き込む気か。
数斗が廊下の壁にもたれたのを同意ととって、鞠はユエに向かった。
「ミヤコがいなくなったわ」
「ミヤコが？　発作じゃないのか」
「違うわ。まだ一ヶ月も経っていないし」
「じゃぁ、何か手がかりは？　辺りに本当にいないのか？」
「わからない……。ミヤコにはとにかく外に出るなとマイスターが仰っていたから……。彼女がマイスターとの約束を破ったことはないわ」
落ち着かない様子で、鞠は髪をかきあげる。
「私はここのところずっと出かけていたから、彼女のことはメネッセかスペクストに任せていたの。でも、今日になって、やっと片づいたから様子を見に行ったら……」
ユエは狼狽える彼女と一緒になって、どうしようもなく視線を巡らせた。
「とにかく、メネッセとスペクストに話を。それからここに異常がなかったか調べて…」
「そんな悠長なことで本当に大丈夫？　ミヤコにもしものことがあったら、私は……」
「一つ、提案が」
小学生の生徒がよくするように、数斗が手を挙げて二人に呼びかけた。鞠が訝る。
「何……？」
「何か手がかりを見つけないことには探せるものも探せないのでは。だったら、大人しく地道な捜査から割り出していくのが妥当だ」
「……その真意は？」

「静世にリゾットを作って桃缶を開けなくちゃならない。その後でなら幾らでも探しに行くよ」
なるほど、とユエは頷く。
「貴方にとって、優先順位が違うわけだ」
数斗は呆れて首を振った。
「俺は約束した順に片づけていくんだ。公平だろ」

※

ミヤコの部屋には何もなかった。
ベッドもなければ椅子もない。ただ、数冊の本と一抱えはあるクッションが置いてあるだけだ。
「……リビングで入り浸るわけだ」
物見遊山で眺めながら、数斗は呟く。
ミヤコは普段、何も喋らない。しかし、リビングで洗濯物をたたんでいれば手伝うし、キッチンに来ては皮むきを手伝った。一人娘ならさぞ可愛がられているはずなのに、どうして数斗の手伝いをしていくのかが不思議だった。
「駄目だわ……。スペクストもいない」
部屋に入ってきた鞠は深く溜息をついた。
数斗がリゾットを作っている間、鞠とユエの二人でメネッセやスペクストに事情を話しに行ったらしいが、スペクストだけが見つからないという。
「メネッセは、最近はスペクストがミヤコの面倒を見ていたっていうのよ」
スペクストは、がさつな男だが存外に子供好きでもあるらしい。
「二人で一緒に出て行った可能性は？」
「それなら、スペクストは必ず私か師範に知らせる。無断で居なくなったことはない……。というより、何の反応もなく、ここを抜けられるはずはない」

この地下施設には所狭しとセンサーが取り付けられている。指紋センサーはドアには必ず取り付けられており、あらかじめ入力された個人データを元に、本人確認が始終行われている。
それが、忽然と消えているのだ。
「行方はわからないのか？」
「静世が得意なんだけど……」
彼女は、一見元気そうでもまだ熱がある。術を使うことはできない。
「そういえば、あの姉妹、両親を早くに亡くしたと言っていたな」
「ええ」
ユエを顧みる。
「どうやって術を覚えた？」
「マイスターと鞠に師事したのです。才能はありますから」
「なら、鞠が術を使うことは？」
「……できないわ。探索している人数が今、多すぎるの」
「しょうがない。探しに行くか」
数斗は何気なく手にとっていた本をクッションの側に置いて、ドアへ向かった。
「待って。何処に行ったかもわからないのに……」
鞠が急いで追いついてきた。
「ここで待っててても同じなんだろ？　じゃぁ手分けして探した方が無難じゃないか」
「発作かもしれないの」
「発作？　病気なのか？」
鞠はユエと顔を見合わせる。
「ミヤコの発作は、狼族特有のものです」
ユエはためらいなく数斗を見遣った。
「月に一度、狼の姿に変身するのです。変身すると、彼女は意識を失い、本能のままに人を襲うことがあるのです。それを、私たちは発作と呼んでいます。ミヤコはその前後によく行方不明になります。

貴方に会った時もちょうどその変身の時でした」
「今回もその発作？」
「いや……。以前の発作からまだ一ヶ月も経っていない。……説明のつかないことが多すぎる…」
ユエはそのまま顔をしかめて考え込む。数斗は手を振った。
「じゃぁ、アンタはここに残ってアキラに伝えてくれ。俺はとりあえず探してみる」
「……私も行こう」
「誰かがアキラに知らせた方がいいだろう。瀬戸さんが残るのか？」
「私も行くわ」
鞠は眉根を寄せたまま、応えた。「胸騒ぎがするの。危ないって分かっているのに朝香や静世に任せておけないわ」
親心というやつなのだろうか。
「なら決まりだ。三人で行こうか」
ミヤコの部屋を出ると、廊下でメネッセがスーツ姿の彫像のように壁際に立っていた。
「教授」
「メネッセ。できるだけ、朝香と静世の側にいてくれ。不測の事態だ。何が起こるかわからない」
「教授。マイスターに連絡は？」
「私から入れておこう。あなたは朝香と静世を頼みます」
「わかった」
頷いたものの、メネッセはまだ何かを言いたげに立ち止まる。数斗が目の前に立って目配せしてやると、頷いた。
「スペクストに気をつけて」
数斗は笑って少し高いメネッセの肩を叩いた。
「ありがとう」
そう。ミヤコの行方はスペクストが知っている。
※
雨が降っている。曇天の隙間を縫うように雨粒が走り、大地に命

をもたらしている。
「大丈夫なの？」
鞠が心配そうに尋ねてきたのは当然で、吸血鬼は流れる川や雨が苦手と言われている。
「俺は特別だから」
「混ざり者だから？」
とはいえ、濡れるのは嫌がって数斗は傘を差した。
地下へ続くエレベーターの入り口の屋根から臨む薄闇の雨模様は、むしろ歓迎すべき天気だ。しかし、着ている黒コートが湿気を吸い込み、重くなってきていた。
「車を出してくるわ」
鞠はそう言って先に神社の階段を駆け下りていった。
「アンタは大丈夫なのか？」
のんびりと男二人で境内を歩き始めて、ユエをサングラス越しに見遣った。皮ジャケットを羽織ったユエは、混ざり者ではない吸血鬼のためか、いつも青白い顔がさらに青ざめている。
「貴方ほど元気ではないが、平気ですよ。これでも、少しは長生きしている」
雨が苦手というのは吸血鬼全てに当てはまらない。長く生きていれば対処法もある。
「そうか。いや、失礼だったな」
ユエが首を振った。
「私は、人間から吸血鬼になった洗礼者です。雨や川には多少の耐久がある。それだけのことです」
「アンタは親が良かったんだな。それに洗礼者でも苦手な者は苦手だ。これはもう、生まれ持っての性質みたいなものだから」
傘に跳ね返る雨音が少しずつ弱まってきている。もうすぐ上がるのだろう。境内を出て、数斗達は長い階段を下り始めた。
「……貴方はもしかして純種（ノーブル・レイス）のご子息？」
「……古い言葉を知ってるな」

ノーブル・レイスは吸血鬼と吸血鬼の間に希に生まれる、純粋培養の吸血鬼のことを指す。元々、出生率の低い吸血鬼である。昨今の“親”殺しや居住環境の制限によってその人口は一パーセントにも満たないと言われている。

「それに、今じゃ“高貴な種族”なんて誰も使わないよ」

「原種（オリジナル・シン）、ですか？　キリスト教の原罪と同じ名前なんて、冒涜です」

「ｎｅｉｇｈｂｏｒｈｏｏｄ」

小雨になりつつある雨の間隙に薄い雲が覗いている。階段に覆い被さる林から落ちる水滴はすでにほとんどない。

「“遠い隣人”っていうのがある」

「……聞いたことがありません」

ユエは不可解なことを聞いたとでも言うように眉根を寄せる。数斗は面白半分で講釈を垂れた。

「オリジナル・シンは半端者がつけた名前だろ。大昔はエミグラント、なんて呼んでたらしいけど」

「エミグラント……？　亡命者、ですか？」

「吸血鬼は、古いだけが取り柄の種族だからな。呼び方は色々ある」

「……マイスターは貴方を、“存在”と呼んだ」

苔むした階段は雨に濡れて随分と滑りやすくなっている。凹凸の少ない路面は滑り止めの少ない革靴をスケート靴にしたがっているようだ。

「私などよりずっと長く生きておられるマイスターが、存在と呼んだ。それはどういう意味だったのですか」

靴音が階段で震動する。

「半端者は、確かにより力の強い者の血を求める傾向がある。しかし、モードレッドほど長く生きた半端者も珍しい。それだけに、既に子爵ほどの力はあるでしょう。なのに、まだ貴方の力を欲しがっている」

傘はもう必要ないかもしれない。

数斗は傘を閉じた。すると、小枝から落ちてきた雫が頬に当たっ

た。
「貴方は、何者だ」
つまらない質問だ。だが、非常に興味深い疑問でもある。
階段ももう終わりだ。
「俺が聞きたいよ」
数斗は最後の一段を下りた。
「どうかしたの？」
愛車らしい外車の前に鞠が立っている。
「俺が何者かって話だよ」
数斗は返事を待たず、たたんだ傘を先に放り込んで後部座席に乗り込む。
続いてユエが助手席に、鞠が運転席に乗った。
低いエンジン音が車内にも響き、タイヤがわずかに砂利を蹴る。
「私も知りたいわ」
鞠がハンドルを切った。国道に乗り上げる前に車を止める。
「今はミヤコを探すんだろ。なら東へ」
「東？」
助手席のユエが振り返ってくる。
「勘だよ。勘。闇雲に探すより良いだろ」
「そんな……。街は西ですよ」
「賭ける？　アンタが勝ったら俺の正体を考えてみよう」
「ふざけないで下さい」
ユエは不機嫌に顔をしかめるが、鞠は笑った。
「では、東から」
車は東に向かって、動き出した。
東側は何処までも深い森が続く山脈地帯だ。名ばかりの国道が敷かれてはいるが、車の通りはほとんどない。
雨上がりの霧が山間を駆け上がっている。引いていく雨雲の隙間から陽光が差し込んで、霧と雲を照らした。
「アキラは何か言ったのか？」

ユエはフロントガラスの先を見つめたまま、息をつく。
「いいえ。ただ、随意にせよと」
気苦労の多いことだ。
「任せてくださっているのよ」
鞠がスピードを上げた。
「危険な場所に行くのは、私たちだから」
「おいおい。そんなに出していいのか？」
百キロを超えて、警告ランプがついた。ただでさえ曲線道路が多い道で、速度を上げるのは自殺行為だ。
「……後ろから何かがついてきてるわ」
不穏当な冗談を言える状況でもない。バックミラーを覗くと、確かに何かがこちらと並走しようかという勢いで追いついてきている。
車でもバイクでもない。煙のような霧をまとった空気の固まりである。それがジェット噴射の如く国道を疾走しているのだ。
こちらは百キロをとうに超えて走っているというのに、固まりはゆっくりとだが、確実に距離を詰めている。
「あれに心当たりは？」
「あれば、こんなに驚きはしません」
ユエは車の取っ手を掴んで苦々しく呻いた。
「そもそも、私はこういったジェットコースターのような乗り物が嫌いなのです」
「恨み言は後ろの奴に言ってくれ」
数斗は後部座席に置いてある傘を持った。
「上の奴にも」
三人ともスピードに乗った車のドアを蹴り開けた。そしてそのまま外に飛び降りる。
次瞬。
慣性で走る車の屋根に巨岩が突き刺さった。
屋根からひしゃげた車はそれでもよろよろと道路を走って行く。
何処からか狙って落とされたとしか思えないようなタイミングの

良さである。
　その次の瞬間。
皮膚を突き破りそうな強風が三人を襲った。分散した風は体を殴りつけ、もう少しで倒れかけた。しかし、目も開けられない突風は十秒ほどで通り過ぎたため、膝をつかずに済んだ。
　続いて、爆音が百メートルほど先の曲線で鳴り響く。乗り捨てた車がガードレールに衝突したらしい。
　体の重心を確認しながら立つと、道路の向こうに爆炎が見えた。
「……ちょっとしたアクション映画だな」
　のんきな感想を述べる間もなく、頭の上で空気が収縮し始めた。煙を上げて真空になり、一陣の突風を放つ。
　咄嗟に身をよじると、間近にあったガードレールとアスファルトが真っ二つに割れていた。
　かけ声も相談もないまま、三人は目の前のガードレールを飛び越えた。ガードレールの下は崖になっており、その下は鬱蒼とした森である。
　崖を滑り降りて、今度は木々の間をすり抜ける。樹陰を通り過ぎると小枝が鋭い破裂音と共に落ちてくる。しかしそれは予兆で、次は見えない大鎌が木の幹ごと切り倒す。
　一歩踏み出すと、不自然なことに邪魔になるほど生えていた草木がない。怪訝に思うのも束の間、地面がひとりでにうねり始める。
　飛び退いて枝につかまり、その枝に飛び乗る。だが、そこに奇妙な羽根を持つ人の頭ほどの球体が通り過ぎ、太い枝を切り落とした。
　切り落とされた枝の上を踏み台にして、更に上の枝に飛び乗る。
「大丈夫？」
　鞠も木の上に逃げたようだ。しかし、羽音を聞きつけて振り返らずに次の枝に飛び移る。
　轟音が木々を揺らした。思わず顧みると、ユエが空飛ぶ球体に向かって腕を突き出している。その爪が瞬時にコンバットナイフほどにまで伸び、追いかけてくる球体を切り捨てた。斬られた瞬間に、

球体は大きな爆発音をたてているのだ。
追いかけてくる球体の数は見る間に減っていく。しかし、彼が乗っていた枝を複数の球体の羽根が鋭く切り裂き、落とされる。バランスを崩したユエに向かって、残っていた球体、十数体が群がっていく。
「教授！」
数斗と並走していた鞠がさすがに枝を蹴った。彼女が地面に降りた途端、草木の消えた地面が波打ったかと思うと粘土のようにうねった。
鞠が咄嗟に飛び上がると、巨人の手のような形に地面が姿を変えて、彼女の足先を掴んだ。
同時に数斗が乗っていた木が揺れ始める。しっかりと根を抱いていたはずの地面が底なし沼のように溶け始めている。数斗は鞠が乗っていた木に飛び移り、低い枝から鞠の腕を掴んだ。
地面に引き込まれようとしている彼女の腕を辛うじて掴んだが、彼女の半身はすでに泥の中だ。
泥は蟻地獄のように彼女の体に絡みつき、ずぶずぶと音をたてその粘度を増していく。
ふいに、熱を感じて手を離した。
気づいた時には鞠の腕を放している。
再び掴もうとするが、彼女には届かない。
鞠は沈み込む泥に手のひらを当てた。
すると泥から煙が上がった。瞬時に焼け焦げた砂に変わる。
鞠が目を閉じる。
だがすぐに開いた。
しかし、彼女の焦げ茶色の瞳は、青白い銀に変わって白々とした眼光を携えている。
彼女が息を吸い込んだ。
すでに泥は彼女の胸まで捉えている。
しかし、鞠は胸襟いっぱいに空気を吸い込み、吐いた。

吐き出したのは二酸化炭素ではない。
青白い炎である。
炎は彼女の周りを覆っていた泥を舐め尽くし、既に水のようになっていた地面を焦がす。焼かれた地面からは高温の水蒸気が上がり、雨上がりのひんやりした空気を一掃した。ひやされた水蒸気が小さな雫となって葉に着く頃には、泥は既になかった。代わりに辺りを埋めているのは乾いた砂である。
数斗が降り立つと、砂漠の砂のように軽く足が沈んだ。
この砂漠を作り上げた張本人はようやく砂から這い上がったところだった。
助かったというのに何故か不機嫌な彼女に顔を向けると、鞠は砂のついた長い髪を肩から払った。
「靴を片方なくしたの。砂に埋まってしまったわ」
上等なハイヒールが片方ない。それに数斗の着ているコートが何着買えるかわからないようなスーツが泥だらけだ。クリーニングに出しても、元通り着れるかどうか。
とりあえず息をつくと、羽音が耳をついた。
音源を見つけると、あの羽根のついた球体である。高速で動く羽根で木を切り倒しながら向かってくる。
だが、道半ばで球体は爆発した。
その小さな爆炎からはナイフが伸びている。
否。
長く伸びすぎた爪である。
「……散々な目に遭いましたね」
指に残った煙を払って溜息をついたのは、ユエだった。
煤汚れて所々服を斬られてはいるが、真っ直ぐ立っている。彼は煩わしそうに乱れて落ちてきたらしい、長めの前髪をかきあげた。バイザーをかけ直し、ようやく顔をあげる。
「いったい、何だったんでしょうか」
数斗は足下の砂漠に何かの尻尾を見つけて引き抜いた。

それは、小さな蛇だった。
マムシにも満たないようなこの蛇は、すでに死んでいるようだが鱗はアコヤガイのように複雑な色合いで光っている。
「……ノームか」
欧州の地下に暮らす土の妖精である。穏和な気性で、その上臆病なため滅多に人を襲うことなどない。
ちょうど蛇の耳の後ろに、二本の牙痕がある。既に噛まれて死んでいたようだ。
「日本にはいない妖精ね…」
顔をしかめた鞠に蛇を押しつけ、数斗は視線を巡らせた。
「あ、ちょ、ちょっと！」
慌てる彼女を無視して、木の上にぶら下がっている物体を見つけて枝に飛びついた。
幾らか枝を渡って木の頂上近くで、ぶら下がっていたのは薄緑色の鳥である。長い尾のこの鳥も既に死んでいる。
鳥の死体を抱えて飛び降り、地面に近いところで枝に捕まった。
「それは？」
死体をユエに持たせて、数斗は再び地面に降りた。
「シルフ」
やはり欧州の海や森、草原に住む、何に対しても友好的な妖精である。ひとたび怒らせると烈火の如く怒り狂うが、サラマンダーとは違い、時間が経てば忘れてくれるお人好しだ。
鳥も蛇と同じように首に牙痕がある。
「サラマンダーにノーム、シルフ……。どれも捕まえるのが難しいと言われている妖精だな」
「我々、吸血鬼でもなかなかお目にかかれない妖精ですよ」
そう言ったユエの手にあったシルフの体から突風が巻き起こった。それは死体に絡め取り、やがて死体自体も風となって消えた。
鞠が持っていた蛇も、土塊となって草木の下に消えた。
「……火で燃やすなんて、悪いことをしてしまったわね」

「狐火は、まやかしの火だと聞いたが、アンタの火は本物だったのか？」
尋ねると、鞠は薄く笑んだ。
「幻の火は元々使える火だけれど、私は術と合わせて使うから、実際の火と変わらないの」
「彼女は私より長生きの九尾狐ですから、大抵のことはできます」
隣から解説を入れたユエを、鞠は睨んだ。
「人を年増みたいに言わないでよ。私は、れっきとした神社の守り主なんだから」
「あの神社の？」
「そうです。確か、もうかれこれ二千年……」
「あの神社に来たのは千八百年前よ！」
大声で大真面目に応えてから、乗せられたことを悟った鞠は、気まずそうに眉根を寄せた。
「……とにかく帰りましょう。私たちがこの調子だと、朝香達がどうなっているか心配だわ」
「ミヤコを探しに来たのに？」
「でも……」
鞠は爪を噛む。
どうしようもない。手を打てば打つほど先手を打たれているのだ。
ここから急いで帰ったとしても恐らく後手に回っている。
「それでも……」
言いかけた鞠は息を呑んだ。
微かな、獣の声を聞きつけたのだ。
それは低く、しかしこちらに近づいてくる。
シルフに切り取られた枝葉が鳴った。
振り返ると、いつか見た銀色の狼がのっそりと茂みからこちらを窺っている。
その物静かな瞳に数斗は見覚えがあった。
「ミヤコ」

呼びかけると狼は唸った。険しい顔つきで身を沈める。
獣特有の敏捷な体を伸縮させ、地面を蹴った。
人型では歩きにくい草木の林をいとも容易く突っ切り、名前を呼んだ数斗に向かって大きな口腔を開けた。
「貴恵村さん！」
飛び出してくる鞠を制止して、数斗は動かなかった。
狼も立ち止まった。
惑うように口を閉じる。
「帰ろう。ミヤコ」
戸惑っていた禍々しいまでに大きな狼は、数斗の前で頭を垂れた。
この狼、間近で見ると仔馬ほどの大きさがある。
ちょうど額の辺りを撫でると、光沢のある銀の毛がふわりと指間を流れた。
すると、次瞬にはそれが黒髪となった。
黒髪は伸びて、銀色の毛は抜け落ち、手足は縮む。長い毛の間から白い手足が覗き、突きだした鼻は収縮し、目を閉じた少女の顔になった。
十二、三歳の少女である。
漆黒の表情が淡い瞳が見開く。
「……わたしは……」
数斗は顔をしかめて、コートを脱ぐと少女に被せた。
狼から変身を遂げたミヤコは、丸裸だった。
「着なさい。静世の二の舞になるから」
「あ……はい。でも……」
数斗自身に童女趣味はないが、何処で変態吸血鬼が見ているか分からない。偏見だとは思うが、変態の考えていることは理解できない。
「あなたが風邪をひきます」
「……そうかもね」
数斗は薄手のシャツ一枚である。ミヤコは、吸血鬼が寒がりであ

ることもよく知っているようだ。ともすれば、風が吹いただけで鼻水が出るほど体が弱い。
「でも、俺はいいから。着てなさい」
言った矢先に大きなくしゃみが出た。
「本当に大丈夫ですか……？」
ユエや鞠も心配そうに眺めてくるが、どうしようもない。
「ミヤコは俺が背負うよ。コートごと背負っていれば、湯たんぽ代わりになるだろ」
そう言うと、珍しくミヤコが笑って頷いた。
※
ミヤコは何も覚えてはいなかった。ただ、最後に話をしたのはスペクストだという。
「スペクストが……？」
国道を歩きながら、鞠は細い顎に指をあてた。
「急いで帰った方がいい」
ユエが真面目顔で提案する。
「この中で、誰か瞬間移動の方法を知っているのか？」
苛つくように鞠は顔をしかめる。
「どうすればいいのよ」
「どうもこうも。帰ればいいんだ」
数斗も苛々と、眼前の道を睨みつけた。
既に二時間以上、同じ道にいるのだ。
いくら車を全力疾走で飛ばしたと言っても、せいぜい一時間程度の道のりのはずだが、いくら歩いてもたどりつかないのだ。
「幻術をかけられているのでしょうか」
「見ればわかる」
歩くだけ無駄なので、鞠以外は立ち止まって霧の流れる同じ道を眺めている。
「誰よ。こんな場所に術をかけるなんて」
鞠はジッとしているのが嫌なのかウロウロと動き回る。

「モードレッドか……スペクスト」
ユエの言葉に、鞠が余計に苛々と眉根を寄せた。
「スペクストが？　どうして？」
「わかりません」
ユエにはっきりと言われて、鞠は黙り込んだ。彼女も可能性を考えていたのだ。だから尚更、不機嫌になる。
「あなたも考えて。貴恵村さん」
そう鞠に睨まれて、隣に立っていたミヤコが背中に隠れた。
「とりあえず、道を開くか」
いい加減、面倒だ。
手のひらを正面にかざした。すると、暗幕を掴むような感触が指先に触れる。触れた先を数斗は掴んで無造作に引っ張り込んだ。
バサリと紙芝居のように風景が変わる。
「……境内」
ミヤコが小さく声を漏らした。
確かにここは道路の真ん中ではなく、境内の中である。湿気を含んだ森林が静かにたたずんでいる。
瞬間移動ではないが、近区域、自分の知っている場所ならば空間を移動することができる。元々は逃走用に身につけた術だったが、案外、用法はあるものだ。
数斗は肩を回した。
「何かいるな」
訳も分からず、辺りを見回していたユエと鞠が表情を堅くした。
「貴恵村さん」
「はい？」
「ミヤコを連れて、先に行って！」
鞠が叫ぶと同時に、林の中から人間達がそぞろ出てきた。
いずれも生気がなく、幽鬼のように、二十人以上が境内の周辺を取り囲む。そして、一斉に飛び上がった。
死人形である。

生きている間は決して使わなかった筋力を精一杯使って、彼等は異常な跳躍で一足飛びに襲いかかってくる。
数斗はミヤコを背負うと、走り出す。追っ手がこちらに注意を向けるが、ユエに横面を殴られて昏倒した。
地下へ続くエレベーターにはグールの手は伸びていない。
今まで背中にしがみついていたミヤコが顔を上げた。
「スペクストが変」
エレベーターは地下三階を告げた。
廊下には誰もいない。
数斗はミヤコを連れてリビングに向かった。
だが、ドアノブを回そうとして、止める。
次瞬。
ドアごと何かが突き刺さった。
幅広の剣先である。
深く突き刺された巨剣は破裂音と共にドアを突き破り、大穴を開けた。
その穴から何者かが飛び出し、剣を薙いだ。
轟音が鳴る。
剣先が方向を変えて、正確に数斗の喉元を指した。
「……数斗？」
剣を突きつけていた青髪の男が、顔を上げる。
「……スペクスト。また鞠に怒られるぞ」
顔を歪めると、スペクストは巨剣を引いて肩に担いだ。
「いやぁ。悪い、悪い。今さっきまでグール共がウロウロしてたんだよ」
「その割に死体がないな」
「全部外に放り出した。くさいだろ？」
「そうだな……。そういえば、朝香達は？」
「朝香ならそこに」
スペクストに指されて、リビングを覗くと、朝香がソファの隅に

座っている。
「朝香」
呼びかけると、彼女は弾かれたように振り返る。ひどく怯えた顔だ。
彼女は何かを言いかけて口を開くが、返事の代わりにミヤコをリビングに入れた。
「やっと見つけたんだ。服を着せてやってくれ」
そのまま数斗は踵を返して部屋を出た。
「メネッセと静世は？」
「別の部屋で一緒に居るよ」
スペクストはそう応えてから、手招きした。少し耳を傾けると、彼は低い声を出した
「裏切り者がいる」
目を向けると、神妙な顔でスペクストは頷いた。
「教授だ」
「……ユエが？」
「グールが吐いた。今、ユエは？」
「どうするつもりなんだ？」
スペクストは珍しく応えに迷って押し黙る。
「捕まえるなら何処かに閉じこめておけばいい。吸血鬼に操られているなら、呪力影響の無い場所で解呪する必要がある」
提案すると、スペクストは巨剣の柄を握りしめた。

檻

教授は、相変わらず本を読んでいた。

「やぁ。朝香」

小さな頃から見てきた、一つも変わらない笑顔。

朝香は彼に応えられず、盆に乗ったオムライスに視線を落とした。

奇麗にご飯を巻いたオムライスとコンソメスープ、それにトマトジュース、デザートにプリンまでついているあたり、作り手の神経質なまでの心配りが見て取れる。

この昼食を作った男の無愛想ぶりが思い出されて、朝香は口の端を曲げた。

グール達の襲撃があって三日が経とうとしていた。

静世の夏風邪は回復したが、S・S・Cはまだ熱に浮かされているようだ。

裏切り者が出たのだ。

モードレッドという大量殺人を繰り返している凶悪な吸血鬼が、メンバーに新しく入った吸血鬼を狙っている。S・S・C自体もモードレッドを始末する計画があったので、狙われている吸血鬼を施設に匿うことになった。しかし、逆にモードレッドの呪力の支配下にくだってしまった裏切り者が出た。

それは仲間内による内部告発で発覚し、マイスターは決定を下した。

呪力が消えるまで、裏切り者は監禁すると。

「今日はオムライスか。毎日、手が込んでるな」

教授は受け渡し口に置かれた盆に手を伸ばした。

この黒髪の吸血鬼は、朝香が物心もつかない頃から姉の静世と一緒に面倒を見てくれていた。両親を早くに亡くした朝香にとって、いわば肉親のような人だ。穏和な人柄でメンバーの誰よりも優しい。

そんな彼が、内部告発で裏切り者として、地下施設の最奥にある

独房に監禁されている。
普段は凶悪な妖怪を一時的に閉じこめておくのに使われるだけの部屋である。
独房と言っても鉄格子が填っているわけではなく、完全な四方体の部屋である。何の衝撃も音もない、常に五感をフルに使っている妖怪にとってはある意味で地獄のような部屋だ。静か過ぎるのである。
だが、教授は本を読むには最適だと読み損ねていた大量の本を持ち込んで休暇を決め込んでいる。
「朝香？」
「教授のバカ！」
通話用のマイクの音量を最大にして叫ぶと、朝香は独房を後にした。
エレベーターに向かう途中で、静世に出会う。
「教授はどうだった？」
もう一人、裏切り者として独房に入れられてしまった人がいる。
静世と共に術を教えてくれた師範だ。かの美しい九尾狐の妖怪は、教授と共に育ててくれた肉親の一人である。あらゆる術に長けた人で、妖怪でありながら退魔法を今も教え続けてくれていた。
この教授と師範の二人を告発したのも、朝香にとって肉親も同然のスペクストだった。腕白な子供がそのまま育ったような彼は、案外子供好きで小さな頃は教授やメネッセよりもスペクストと遊んだ。悪戯も喧嘩の仕方も彼から教わったが、大切なことばかり教えてくれた。
「相変わらず本ばっかり読んでる」
「そう。良かったわ」
静世は嬉しそうに頷いた。五才も年上の姉だが、妹の立場から見ても不安になるほどお人好しなところがある。
「あの人達、三食食べなくても良いんでしょ？　何でアイツの作ったものは食べるのよ」

「あら？　ヤキモチ？」
「違うわよ！」
「貴恵村さんって本当にお料理上手よね。何て言うのかしら、手際が違うわ。朝香とは」
痛い所をつかれて朝香は押し黙る。朝香には、料理を作る才能がごっそりと抜け落ちているらしく、目玉焼きすらまともにできた試しがない。
「お洗濯もお掃除も素晴らしいわ。立派なお婿さんになれるわね」
世の男性は嫁に完璧な家事を望むものだが、案外、男の方が家事には向いているのかもしれない。女よりマメだ。
「一ヶ月とは言わず、ずっとここに居て欲しいわね。貴恵村さん」
静世にとってはその程度の存在なのだろうが、S・S・Cにとって、今やあの男は大きな癌だ。
長年培ってきたS・S・Cの基盤を地震のように揺るがせている。
エレベーターはすぐに地下三階を指した。
「朝香は貴恵村さんが嫌いなの？」
小学生のような口調で尋ねてくる姉が、時々、堪らなく嫌になることがある。そして、ここのメンバーと一緒に朝香を育ててくれた姉に向かって、そんなことを思う自分が、「嫌いよ」
嫌いで堪らない。
リビングに入ると、思わず足を止めた。先程、静世に嫌いだと宣言した男が、ミヤコと一緒にオムライスをつついているのだ。
朝香と静世に気がつくと、男は笑いもせず顔を上げた。
絵から抜け出てきたようだ。
そう表現したのは師範だったか。確かにそう思えるような長身の男である。色白のはずの朝香が恥ずかしくなるほど白皙の容貌は、半分がサングラスに隠れている。しかし、隠れていてさえ、ひどく端正であることは整った鼻筋からも伺える。青に近い銀色の髪だが、辛うじてサングラスがあるために、男は形を潜めていられるのだ。サングラスの奥にある、黄金色の目が露わになると、誰もが寒気を

覚えざるを得ない。
人間にも妖怪にもそぐわない、異質な存在なのだ。
「ご苦労様。毎日、悪いね」
「いいえ。好きで行ってますから」
静世は愛想良く男に応じると、ソファに腰掛けた。
「昼飯、今もってくるよ。デザートのご希望は今聞こうか」
「昨日はババロアだったから、今日はプリンあたりかしら」
「わたしも」
「そうね。ミヤちゃんはプリンが好きだったわね。私も大好きなのよ」
「勘がいいな」
「美味しいものはちゃんと分かるの。そうだ。朝香は何がいい？」
背中にあるのは、グールが襲撃してきたときに壊されたドア。今はすっかり直されている。そう、あの男に。
「いらない」
低く声を返すと、静世が困った顔をするのがわかった。
「食べたくない」
「あさ…」
「わかった」
たしなめようとした静世の声を男が遮った。そして、男は朝香の隣をすり抜けて部屋を出て行った。
「……朝香」
静世に応えられず、朝香はうつむく。
グールが襲撃してきたあの日。
静世の氷枕を換えに台所へ向かっていた。そして、廊下でスペクストに出会った。
教授達が探していたことを告げると、スペクストは、今まで見たことがないような、気味の悪い笑い方をした。
おかしい。
そう思った時には遅かった。

抵抗する間もなく、スペクストの腕に首を掴まれていた。
異変に気がついた静世やメネッセに向かって、スペクストは朝香に剣をつきつけて脅したのだ。
教授達が戻っても、静世が寝ている部屋から出てくるな、と。そして朝香にも、教授達がリビングに来て何か尋ねても何も言うなと脅された。
喋った時には、静世とメネッセを殺す、と。
こけおどしではない。スペクストが本気になれば、メネッセや静世では歯が立たない。
しばらくすると、教授達は戻ってきた。
あの男がミヤコを連れて、リビングにやってきたのだ。
スペクストは、グールが来たと嘘を言った。グールなど、地下施設には一匹も入っていない。
あの鈍感な男もスペクストの異変に気がついたはずなのだ。しかし、彼はミヤコを朝香に預け、何も確かめないまま、地上へと向かっていった。
グールの掃討が終わってから、スペクストが教授を告発した時も、あの男はスペクストを弁護した。静世やメネッセは弁護に加わらなかったが、朝香は教授を弁護した。
モードレッドに操られているのは、スペクストだ。
師範も一緒になって教授を弁護したが、マイスターは結局、新参者の、あの男の言葉を信じた。
弁護した師範は教授と共に独房に入った。朝香が独房に入らなかったのは、ただ単にまだ子供だという理由からだった。
おかしいのだ。
全てが、あの男から狂い始めている。
朝香は部屋を出た。

頼みの綱の教授と師範が独房に入っている。
争いごとの嫌いな静世が内部探査などやるわけもない。メネッセ

は、マイスターの命令には絶対服従だ。
ミヤコにマイスターを裏切るようなことを頼めるはずもない。
まるで、朝香が牢獄に入っているようだ。
自由に動いているのに、他人に動かされている錯覚。
錯覚とは知りながら、拭いきれない違和感。
だが、朝香は最後に残った人物の部屋の戸を叩いていた。
「スペクスト。いるの？　朝香よ」
ノックしたドアが緩やかに動いた。
その先を見てはならないと警告がよぎる。
だが、好奇心と猜疑心が両立して朝香はドアを押し開いた。
粗野な性格でありながら、ベッドと椅子しかない殺風景な部屋に、見慣れた青髪の男と、見慣れない白髪の男が居た。
白いコート、白い髪、禍々しい紅玉の眼。
全て、スペクストが倒れた日に見た、あの日のままだった。
凶兆を喜ぶかのような柔和な笑みを浮かべた白髪の男は、椅子に腰掛けて長い足を組んでいる。
「どうしました？　お嬢さん」
よく透るテノールは、心地よさの裏に腐敗臭を漂わせている。
スペクストは淡く微笑んだまま、朝香を振り返る。
何もかもが幻影に見えるというのに、男の赤い眼だけが爛々と煌めいている。
「私でよければ、ご相談に乗りましょうか」
朝香は自分が正しかったのだと、確信した。

※

錆のつかない刀である。
世に生み出されてから二千年余り。妖怪の血を吸い続け、それ自体が妖怪のように生き続けている刀である。
実際、刃こぼれもなく、折れることもない。
朝香は刀を鞘に収めた。

この日本刀を持たされたのは、わずか五才の時だった。
両親の形見だと、静世がずっと持っていたのだが、静世にはこの刀は扱えないから、と朝香が持つことになった。
そのとき、既に朝香と静世は師範に師事しており、この刀のことはほとんど何も知らないと言っていい。
幾ら齢二千年を超える妖狐とは言っても、退魔師が秘伝として伝える刀の由来までは知らない。
朝香は何も知らないまま妖怪を斬り、葬ってきた。
だが、ふと刀と同調するときがある。刀が自分となり、自分が刀となる瞬間が。
その刹那だけ、刀の全てを知り尽くしている自分がいる。
静世は、朝香が何よりも呪という魔力に近いと言った。妖刀と同化できる、呪に同化してしまう体質なのだと。
呪は、人間が作り出した欲を具現化する得体の知れない力である。
呪と同調しやすいということは、退魔師としては優秀になるだろうが、人間としては危うい存在になる。
退魔師として、誰よりも優秀な姉が断言した。
あなたは退魔師に向いていない。

朝香は眼を開けた。
「一人かい？」
白髪の男と、スペクストが境内の闇に紛れて立っている。
この神社自体が、静世の結界だったが、本殿が崩れた今ではスペクストでも壊せるほど弱っていたのだろう。
「最初から、S・S・Cを狙ってここへ来たの？」
白髪の男、モードレッドは首を振った。
「私の長年の戦術だよ。滞在先では、優雅に過ごしたいからね。悪魔払いの類には少し長いバカンスに行ってもらうんだ」
この男が居座った国では、退魔師がほぼ全滅している。
「日本は良い国だ。私たちの仲間は多いし、闇が多くて住みやすい。

それに、彼も見つけることができたしね」
モードレッドの白いコートが闇夜に映えた。
「あんな出来損ないの吸血鬼に何の価値があるの？」
「君は約束を破った」
低く、歌うような声だ。だが、底知れぬ針を含んで、朝香を貫く。
「彼をここへ連れてきてくれるという約束を」
鞘を握った手が汗ばんだ。
そのくせ、Tシャツ一枚では寒いほどの寒気が肌を伝う。
「でも、いいか。期待はしていなかったから」
底冷えするほど怒っているかと思えば、今度はいとも簡単に笑ってみせる。
まるで月の話を太陽の話で返すようなものだ。
モードレッドは、自分でも不安定な精神状態を操作することができないのだ。
「いいかい。世間知らずのお嬢さん。カズト・キエムラという吸血鬼は、素晴らしい吸血鬼だよ。まさしく、原種（オリジナル・シン）と呼ぶにふさわしい」
モードレッドは満天のライトを抱く舞台役者さながらに両腕を広げた。
「紀元前から生き長らえてきた父を持ち、彼自身もキリスト生誕以前から生きている。ローマ、パルティア、ササン、暗黒時代、彼はまさに吸血鬼として王となった。思い通りに人を殺し、血に酔った。あの時代は誰が死んでもおかしくなかったのだよ。ただ、美しくなりたいというだけで若い女の血を浴びたという貴婦人もいた。気に入らないというだけで死刑にし、死人を逆さにつるして血を飲んだ貴族もいた。彼は吸血鬼の社会でも、人間社会でも公爵という位さえ手に入れている」
教授がいればさぞ驚いただろう。
教授は百年、有力な吸血鬼の元で修行した後、七百年かかって伯爵となった。
「人違いじゃないの？　貴恵村なんて日本名じゃない」

「彼の本名はグラール」
顔をしかめた朝香を面白がるように、モードレッドは笑みを深めた。
「グラールは命をさずけるものという意味だよ。物知らずのお嬢さん。彼は文字通り、私に私の望むものを渡してくれるはずだ」
モードレッドは夢から覚めない子供のように天を仰いだ。
「七百年前には既に歴史の表舞台からあっさり消えてしまった彼を捜すのは百年かかったよ。まさか日本の片隅で余生を過ごしているなんて思いもしなかったからね。でもようやく私の望みは叶えられる」
すうと赤い瞳が降りてきた。
「だから、君はもう死んでいいんだ」
脊椎を駆けずる震えで、朝香は思わず刀を抜いた。
ほとんど反射で抜いた刀は切っ先が揺れて、鍔がカタカタと鳴る。
「スペクスト。この子を殺すんだ」
戦意さえ喪失させるような声だった。
今まで身じろぎもしなかったスペクストが初めてモードレッドを顧みた。
「このような娘に構わず、モードレッド様は彼の方の元へ」
「聞こえなかったのか」
モードレッドが囁く。悪魔でもこうまで残酷に耳打ちできないだろう。
「私のためにこの娘を殺しておくれ。スペクスト」
スペクストは逡巡するようにしばらく沈黙したが、やがて肩の巨剣を抜いた。
軽薄な半袖シャツに似合わない、無表情な眼が朝香を捉えた。
やはり、と朝香は自分で納得した。
退魔師に向かないと言った姉の言葉は正しかった。
朝香は同情してしまうのだ。
敵であるはずの妖怪に同情し、剣先を鈍らせる。鈍らせた結果、

命を落とすのだ。
現に今、朝香は自分を殺そうとしているモードレッドにさえ同情している。世を呪い、自分を呪っている彼にさえ憐れみをおぼえてしまう。スペクストには、刀を向けることさえ躊躇する。
戦いにきたことを後悔する。
スペクストがその素晴らしい跳躍力をもって地を蹴った。
一瞬のうちに勝負は決まる。
朝香は切っ先をゆっくりと降ろしていった。
鼓動が早い。
それでいて、スペクストの茶瞳の奥まではっきりと碧眼が捉えている。
巨剣が眼前に迫った。
脅威に面しても眼を閉じないように、スペクストに教えられた通りに朝香は眼を閉じなかった。
だからこそか。
亜麻色の前髪を数本とらえただけで、巨剣が額をかすり、向きを変えたのをはっきりと見た。
気がつけば、スペクストの背が朝香の目の前にある。
わけもわからないまま、茫然と彼を見上げる。
スペクストは険しい表情で、モードレッドを睨むと、巨剣を両手に持ち替えた。
「主従ごっこは、ここまでにさせてもらうぜ」
冷や汗混じりに苦笑するスペクストを見遣って、モードレッドはゆったりと微笑んだ。
「せっかく、仲間を裏切らせてグールの手引きまでさせたのに」
「別に裏切っちゃいない」
「……裏切っていない？」
思わず声が出た。それはいったいどういうことなのだろうか。
「ああ。初めのうちは本当に術にかかってたけどな。お宅より、ウチのボスの方が性格悪かったらしいぜ」

「そのようだ」
何を二人は笑っているのだろうか。
朝香は初めから間違っていたのだろうか。
初めから誰も操られてなどおらず、誰も騙されてなどいなかった。
否。
朝香ただ一人がだまされていた。
誰を恨む必要も、誰を憎む必要もなかったのだ。
「やっぱり、ちゃんと刻印を残しておくべきだね。簡易的な術は脆すぎる」
スペクストは剣を握りなおした。
「そりゃゴメンだ」
モードレッドの靴が高らかに鳴る。
重い足音が境内に響く。彼が歩けば、日本の神社もロンドンの旧市街に見える。
彼は本当に狂ってしまったのだろうか。
人は、残酷な光景に興奮をおぼえるという。興奮は快楽となる。記憶する動物の人は、覚えた快楽を忘れない。繰り返し、刺激と称した興奮を欲しがるのである。
それは、両親の形見を抜き続ける朝香の高揚感と似ているのかもしれない。
妖怪を恐ろしいと思い、憐れだと思う反面、彼等との戦いに快楽を見出してはいないだろうか。
「朝香！　起きてるか？　起きてるなら立って逃げろ！」
スペクストが名を呼んでいる。
朝香は刀を握りなおした。
快楽だと感じていても、それが大切な人を守れるのだとしたら、朝香は刀を何度でも抜く。
「二人で切り込めば、二人で逃げられるかもしれないわ」
立ち上がる。
前を見て、敵を見据える。

「無駄だ」
モードレッドが、白い軌跡を残して消えた。
「スペクスト！」
それはただの勘。
同調するという、ただ一つの特性を持ってし得た、直感だった。
そう。
飛び出したのは全くの偶然だった。
「朝香！」
吐息が首筋を濡らしている。
激痛で刀を取り落とした。
顔のすぐ横で白い髪がゆらゆらと揺れている。
噛まれたのか。
結論づければ簡単な結末だ。
呪の力が首筋から入ってくる。だが、それは途中で弱まり、消えた。
モードレッドが牙を引き抜いたのだ。
朝香は支えを失って、その場に崩れ落ちた。
抱き留めてくれたのはスペクストだろうか。
辛うじて開いている視界の奥で、モードレッドの困惑した顔が見えた。
しかし、それも束の間で、すぐに元の狂気の笑みにすり替わる。
「またお会いしよう」
白いコートがはためくと、実体は幻になって、霞のように消えていった。
「朝香！」
頬を叩く。いつものスペクストだ。
「……良かった」
「良くない！　このバカ娘！」
何でこんなことをしたんだ、とスペクストは朝香の頭の上で呟いた。

「朝香……！」
「……静世姉」
自分でも驚くほど舌が絡んでいる。肩が熱い。
「どうしてお姉ちゃんに相談しないの？　朝香のバカ！」
珍しく怒っている。でも、
「……泣くか怒るかどっちかにしてよ」
「どうしよう！　血が止まらないわ」
いつもの静世だ。
「笑うほど痛いのか？」
嫌な声と共に、焼けるような痛みの肩がぐっと何かで押しつけられた。薄く眼を開くと、誰かの上着のようだった。
血塗れになるから、よせばいいのに。
「ユエ。治せるか？」
「動脈を切っている。血を止めなければ……」
「ごめんね。ごめんなさい」
白い指先が頬に触れた。
「……師範？」
「こんな目に遭わせてごめんなさい」
師範が泣いている。朝香まで涙腺が緩んできた。
「……ごめんなさい」
声を出すと、煩わしそうな声が降ってきた。
「謝るなら後にしろ」
不機嫌な声は珍しい。そういえば、この男から感情のある言葉を聞いたことがなかった。いつもやる気のない声ばかり。それが嫌いだった。
「……良かった……」
意識が白濁していく。
それでも、自分が少しだけ泣いているのは分かった。
「……私だけが、だまされてたのね……」
涙が頬を伝った。

「……良かった……」
誰も憎まずに済んで。
頭がふわりと浮いた。
火照った首筋にひやりとする吐息がかかった。
低い声は優しくまとわりついて、熱を奪っていく。
その代わり、体の奥に熱を残して、深く吸い込まれていく。
意識まで吸い込まれ、それきり、朝香の感覚は途切れた。

首筋に唇を当てている様は、傍目から見れば愛撫のように見えるかもしれない。
しかし、いくら気まずくても止めることはできなかった。
呪を直接、傷口から送り込み、動脈を塞いで残っている呪を取り出さなくてはならない。
長い呪はそれだけ深く浸透させなければ、効果がないのである。
長い聖典のような呪を唱えながら、おかしな少女だ、と考える。
この少女は、自分が仲間から騙されていたことを責めようともしなかった。
ただ、自分が騙されていただけで良かった、と。
確かに、誰からも愛されるべき娘だ。
だが、自分の暗く冷たい部分にまで触れてくるこの少女は、心底苦手だと感じている。
反面、どこまでも自分に正直なこの少女はいつまでも素直なままで、と願ってもいる。
呪が終わる。
少し物足りない気がして、苦笑する。
血に少し酔ったらしい。
頭痛を堪えて顔を上げると、ユエがこちらを睨んでいた。
「……動脈を塞いだんだよ」
「そうなんでしょうね」
「怒るなって」
「怒っていません」
娘を取られた父親の気分らしい。
盛大な勘違いもいいところだ。
急に馬鹿馬鹿しくなって小柄な少女をユエに押しつけるが、ぐいと服を引っ張られてその場に残った。

朝香の左手が、服の裾を掴んでいる。そっと、だが無理矢理はがして、今度こそユエに押しつけた。
すでに夜明け近い。
そろそろ体がだるくなる頃だ。
スペクストが半ば操られていたことは分かっていた。そしてそれをすぐ解かず、充分、泳がせてから拘束して解いた。それから彼には、あの白髪の吸血鬼を騙し続けてもらったのだ。計画はアキラが立てたが、実行は数斗である。何もしらない朝香にスペクストが白髪の吸血鬼に接触させ、おびき寄せて袋だたきにして捕まえる予定だったのだが、思わぬ誤算が起こった。
大きく伸びをすると、静世が背中を叩いてきた。
「エッチ」
彼女は計画を知ってはいなかったが、感付いてはいたらしい。しかし、朝香がこんな事態になってしまっては、どんな説明も言い訳になる。
謝罪の言葉は言えず、叩かれた背をさすって、言い返す。
「セクハラ」
すると、静世は今までにないほど情けなく笑った。
「あとで朝香に言いつけるから」
「死にたかったなら止めやしないからって言っておいて」
そう言って、静世の肩を押してやる。彼女は素直に朝香を抱えるスペクスト達に駆け寄っていった。
静世は許してくれている。
久しぶりに心地よい倦怠感が体の芯にたまっていた。
ズボンのポケットから運良く煙草をみつけて、ライターで火をつける。
くわえた煙草の向こうから、紫煙と共に昇ってくる苦手なはずの陽光が、ひどく奇麗に見えた。
ふいに風が吹いた。
「お疲れ様でした。閣下」

「やめてもらえませんか。それ」
紫煙を吐いて、隣に並んだアキラを見遣った。三揃いのスーツを着た少年は大人びた仕草で肩を竦める。
「では、皇子」
「もっと嫌です」
アキラは苦笑した。
「ではどうお呼びすれば？」
「数斗で結構です」
「礼儀に反します」
「落ちぶれた貴族に礼儀も何もありませんって」
「いいえ。恐れ多くもグランドマスターのご子息に、そんな非礼は」
「じゃぁ、さっさとここから開放して下さい」
「それはできません。マスターのご指示ですから」
「……黙っておけば？　ほら、俺、役に立たないですし」
「何を仰います。私のかわいい娘を助けていただいてありがとうございました」
「……あなたも文句を言いに来たクチか」
「何か？」
「いえ」
とぼけて煙草の紫煙を再び吐く。少し長く生きるととぼけ方ばかりが上手くなるようだ。
「親父殿はまだ生きてますか」
「お元気でいらっしゃいますよ。早くお孫さんのお顔がみたいと」
「……またその話…。もう呆けてるんじゃないですかね」
「楽しみになさっておいでなんですよ」
「……千五百年以上も気長なことだ」
「二千五百年以上生きていらして、一度も妻帯されたことがないという方が気長だと思いますが」
「親父殿は、他に色々作ってるんでしょうから。息子まで作ることはありませんよ」

「ご兄弟の中で一番、可愛がられているじゃないですか」
「どうせ俺は父親似ですよ」
「ではグラール卿」
呆れた声で返ってくる。
「少しは自信をお持ちなさい。あなたはそれだけの価値を持っている」
「買いかぶりです。歳をとれば誰でも可能だ」
「老人は、歳を取ったことで怠惰を身につける。だが、あなたは歳を得ることに怠惰ではない。確実に、何かを身につけて歳を得られている」
だから、とアキラは笑う。
「私はあなたに敬意を払う。たとえ、私より歳をとっておられなくとも、尊敬をもって」
声が空中に吸い込まれた。朝日の当たり始めた境内に、すでにアキラの姿はない。
朝香の容態を見に行ったのだろう。
年を取ることによって、誰もが立派な賢者になるわけではない。
むしろ老人は愚者だ。
自分の経験から逃れられない遺物である。
消えていくしか能のない遺物にどうして敬意を払う必要があるのだろうか。
「……だから、買いかぶり過ぎなんだって」
短くなった煙草を陽光に向かって放り投げた。

※

パウンドケーキの型にタネを流し込んで、ならして空気を抜いてからオーブンに入れる。
コンロのカレー鍋をかき混ぜて、野菜を刻んでサラダボールに盛りつける。梅としそを混ぜたドレッシングをかけて、レモンを混ぜ

た水差しを冷蔵庫から出した。
カレー皿に炊きたてのバターライスを盛って、茄子の入ったカレーソースを流し込む。
「誰も手伝う隙がない」
確かに、数斗のような図体のでかいのがキッチンでウロウロしていれば誰も入れなくなるとは思うが、手伝えないことはない。
隙がないと称したスペクストはカレー皿を受け取ると、感謝の言葉もそこそこにスプーンを取って食べ始めた。どうでもいいことなのだが、この男、食べているものが十円の駄菓子だろうと、高級牛肉だろうと、実に旨そうに食べる。
「見ているこっちが幸せな気分になりますね」
隣で同じように食べ始めたユエがそう苦笑した。
ダイニングでカレーを食べているのはこの二人だけである。
交代で何かをキッチンに漁りにくるのを見かねて、数斗は残っていた材料でカレーなんぞを作ってみたのだ。
「ケーキが焼けるまでに、ミヤコとメネッセも呼んできてくれ」
メネッセは巨漢に似合わず、甘党なのだ。
「数斗が見に行った方が早くないか？　今、食べないんだろ」
既に二杯目をさらおうとしているスペクストに言われて、納得した。
カレーが無くなってしまう前に連れてこなければならない。
数斗はダイニングを出て、最奥の部屋へ向かった。
回廊のような廊下の突き当たりに、メネッセが椅子を置いて仏頂面で居座っている。
「メネッセ。もう少ししたらケーキが焼けるから、カレーの後に食べてくれ」
「ありがたい」
「ミヤコは中に？」
尋ねると、メネッセはジッと数斗を凝視した。
「平気か」

心配そうなメネッセに向かって、口元を緩めて失笑する。心配されるほど緊張した顔だったのがおかしくなった。
地下の、窓のない白壁の部屋には、ベッドだけが置かれていた。後から持ち込まれたらしいサイドテーブルと三脚ほどの椅子は何処か異質だった。
その椅子に腰掛けている淡いピンク色のワンピースを着た少女は、ベッドに横たわる人物の手の上に自分の小さな手を重ねている。
「ミヤコ、もう少しでケーキができる。食べてきたらどうだ？」
いつもは素直に頷く彼女が、今日に限って首を振った。
少女の隣からベッドを見下ろすと、青白い顔の朝香が眠っている。小綺麗な白のノースリーブの腕から真新しい包帯が覗いているが、落ち着いた呼吸で寝息が続いている。
三日も寝れば目が覚めるだろう。
あとは、どれだけ咬まれた呪に対抗できるか、だ。
一度、吸血鬼に咬まれると、傷口の呪が吸血鬼との繋がりになるのだ。いくら打ち消す呪で手助けしたとしても、最後は宿主自身の精神力にかかっている。
三日も眠れば目が覚める。そのとき、人間のままか吸血鬼の奴隷になっているかは本人次第だ。
「ミヤちゃーん。ご飯持ってきたわよー」
メネッセにドアを開けてもらって入ってきたのは静世である。
彼女は数斗を見つけると、口を大きく開けた。
「あら。貴恵村さんの分、持ってきてないわ」
彼女が押してきたワゴンには、三人分のカレー皿とコップ、サラダボール、水差ししかない。
「では私がダイニングに行きます」
メネッセがのっそりと頭を下げたが、数斗は手招きした。
「ここで食べるといい。俺はケーキの様子を見に戻るから。あとで紅茶と一緒に持ってくるよ」
三人分の食事をすっかり降ろしたワゴンの取っ手を掴んで、数斗

はドアを押し開けた。
その後ろから、静世が大声を上げた。
「朝香？」
馬鹿な。
驚いて振り返ると、確かに朝香がよろよろと起きあがっている。
しかし、彼女の目の焦点は未だあっていない。
口を開く。
「グラール閣下」
少女の口から滑り出たのは、低い男の声だった。
「この娘の容態はいかがでしょうか。毒がよく効いているようだ。娘の意識はまだ、深い闇の中でさまよっている」
「朝香……」
静世が今にも泣きそうな顔で口元を押さえた。
「いくらあなたでも私の呪を断ち切ることはできなかったのですね」
嘲笑を含んだ声は少し高くなった。
「口づけの呪は何人にも解くことはできない、そんな迷信を信じておいでなのですか。不可能なことなど何もありません。向上は常に成功へと導いてくれましょう」
「それは人間らしい考え方だ」
不可能はないと思いこめるのは、人間の特徴だ。
「人間らしい？　この私を人間らしいと仰るか！」
男は悲壮なほど声高に笑った。
「まだ人間で在った頃から、狂人よ、非人道よと言われてきた私を人間扱いなさるとは、まったくあなたは素晴らしい」
「吸血鬼の中で、俺をそれだけ褒めるアンタも素晴らしいよ」
同族中では、讃えられるどころか恐怖の対象なのだ。
「やはり、あなたとはゆっくりとお話してみたい」
「俺はゴメンだ」
この役者かぶれと話していると、こちらの頭にまでカビが生えそうなのだ。

「そう仰ると思いました」
朝香の腕が上がった。
すると、彼女の手のひらに黒い球体が宿る。
球体はまず、朝香の手を呑み込んだ。そうして次第に球体……否。ブラックホールはその口腔を広げていく。空間を歪めているのだ。
「……何をするつもりだ」
「お友達もご一緒にご招待いたします」
徐々に大きくなっている黒い穴に朝香はそのまま身をゆだねて、上半身から吸い込まれ、人間大の大きさに膨れあがった穴は足先まで呑み込んだ。
「私も行きます」
ワゴンを置いて歩き出しかけた数斗に、静世が並んだ。
「ご一緒する」
メネッセがその後ろに並ぶ。
ミヤコも数斗の服を掴んだが、それは離させた。
「アキラに知らせてくれ」
物足りない表情のミヤコを置いて、三人はブラックホールに飛び込んだ。

無音の浮遊は一瞬で、足が地につくと、薄暗いが確かに違う場所に立っていた。
見上げても先が見えないほど高い柱が等間隔で並んでいる。
八方の柱は白く見えるが、他は暗闇に閉ざされて何も見えない。
「……朝香がいないわ」
静世は、いつもの朗らかな印象を全て拭い去ったような表情で碧眼を細めた。こうしていれば、彼女が退魔師であることを思い出す。
優秀な退魔師とは、どんな状況にも冷徹無比でいられる人間を指すのだ。
妹を、身を焼かれるほど心配しているにもかかわらず、彼女はそれを見事に抑え込んでいる。

メネッセは低く呪を唱えて、青白い光源を作り出した。小さな炎玉はゆったりと辺りを照らし出す。
「違う空間に出てしまったか」
「いや、同じはずだ。干渉はあったようだが」
数斗は石造りの柱を叩いた。その踏み出した先で、水が跳ねた。
「……水？」
訝ったのは束の間、水が勢いよく流れ込んできた。
あっという間にふくらはぎ辺りまで水に埋まる。
静世が低く、呪を唱えた。プリーツのロングスカートの裾が水に浸かるのも構わず、腰に備えているウエストポーチから札を抜く。
彼女が札を投げると、札は高速で飛び、白い柱をすり抜けた。
二枚目に取り出した符はまだ水位を上げる水の上に浮かべて、印を結ぶ。
札から炎が浮かんだと思うと、水が一瞬で蒸発した。
静世はもう一度、空中で印を結ぶ。
すると、柱の向こうから放ったはずの札が何かを捕まえて返ってきた。
札に絡め取られているのは、複雑な光を放つ、胎児ほどもある魚である。トビウオのような淡いヒレがやけに大きく、鳥のようだ。
「ウンディーネ」
数斗が手の平に乗せると、魚は透明な水となって消えた。
「西洋の妖精ですね。誰にも知られていないような湖や泉、川の上流に住む気まぐれで、感情の起伏の激しい妖精」
後にのこった札を拾い上げて、静世は静かに述べた。
「見たことが？」
「いえ、文献で。まさか、こんな場所で本物を見ることになるとは思ってもみませんでしたが」
四元素妖精は、見ること自体、なかなかできないのだ。良識さえあれば、彼等を捕まえようなどと思わない。
「四元素妖精（エレメント）も大したことはありませんのね」

女声が高い天井に響いた。
「伏せろ！」
メネッセの声で、咄嗟にしゃがみ込むと、何かが辺りの柱を一線した。
摩擦で上がった煙と共に、瓦礫が落ちる。一線された柱は上下にわかれている。それが視界の届く半径五メートルほど続いている。
「お久しぶりですわ。グラール閣下」
暗闇から音もなく現れて、優雅に一礼したのは、いつかサラマンダーを連れてやってきた秘書風の女だった。
「……ハネイア、だったかな」
「光栄ですわ。閣下」
艶然とした声は何処か毒を含んで神経を刺激する。
「今日は、君に主に招待されたはずだけど」
女は質問には応えなかった。
「あの方に、あなたは必要ありませんわ」
女の指先がぐにゃりと変形した。それが大きな口だと分かるのに、少し理解に苦しんだ。
口腔が開くと、先の割れた長い舌が出て引っ込んだ。
血色の悪い舌は、確かに蛇のものだ。口腔の後ろから鱗の頭が顔を出した。丸い目が開き、次いでぞろりとした巨体がずるずるとはい出してくる。三分の一ほど作り上がったところで、蛇は成長を止めた。
右腕に大蛇を備えたハネイアは、軽く笑った。
「ここでお帰り願えるのでしたら、道を作ってさしあげますわ」
「申し出は非常にありがたいんだがね」
数斗は頭をかいた。
「モードレッド卿が連れて行った娘を連れて帰らないと、うるさいのがたくさんいるんだ」
「然様でございますか」
彼女は大蛇がうねる腕を数斗達に向けた。

「一つ質問が。その蛇は？」
「両腕を無くしたわたくしにモードレッド様が下さいました」
「地竜を？　豪気なことだ」
返事の代わりに、蛇が大きくうねった。
鎌首が伸び、獲物を捕らえる蛇と同じように真っ直ぐに突進してくる。
メネッセと数斗が避けて逃げるなか、ただ一人、静世が札を掲げて蛇の頭を押しとどめている。
「静世！」
叫んだメネッセに、もう一匹の大蛇の口腔が襲いかかる。
先を見遣れば、ハネイアの左腕からも大蛇がはい出している。メネッセは口腔を掴み上げるが、のたうち回った大蛇に振り回される。
大蛇が飛び込んだ床は無残にめくれ上がり、柱は脆い砂糖細工のように崩れる。
数斗は一歩引いて、残ったハネイアに向かって走り出す。
「無駄ですわ！」
女の腹が割れた。
そこから大蛇の首が現れる。骨の折れるような嫌な音と共に女の足は退化し、大蛇が腹這いに床を張った。ちょうど、蛇の頭あたりに女の上半身が突き出している。
飛び退いた数斗を追って、女の上半身をつけた大蛇が赤い口を開けて軌跡に食らいつく。
空中で方向を転換し、静世と睨み合っている蛇の腕に降りる。
衝突するかと思えば、大蛇は上手く避け、三つ叉の蛇は首を引いた。
「あなたはあの方に必要はない。あの方に必要なのは、血と妖怪だけ」
「……何を怖がっている」
この女は何を恐れているのか。
目の当たりにして女の恐怖が手に取れる。

モードレッドは、
「死ねぇっ！」
三つ叉の蛇が一斉に数斗へと向かう。既に女は人の皮を脱いで、蛇と化している。
憐れだ。
いつも思うのだ。
妖怪は何処までも憐れだ。
たった一つのものさえ守れない。
守ることさえ許されない。
妖怪の世界は、弱肉強食の世界なのだ。
「貴恵村さん！」
メネッセが叫んだ。
彼は二匹の蛇の頭を両脇に掴んだ。
あと一匹は何処だ。
静世が飛んだ。
三枚の札を投げると、札は空中で停止し、静世が印を結ぶ。
静世の指が札に触れると二匹の大蛇は燃え上がった。
もがいて柱を壊したが、燃え上がる炎に巻かれて灰となる。
数斗の眼前に蛇の口が大きく開いている。
しかし、蛇は無理矢理、圧力をかけられて口を閉じられる。腕を犠牲にし、数斗の前まで詰めてきたというのに、当の数斗に指一本触れることもできずに、空中で絡め取られている。圧力に抵抗して、凶器の牙をむき出そうとするが、逆に顎の骨を砕かれて拘束される。
人間にはわからないのだ。
妖怪の世界は、努力次第でどうにかなる世界ではない。冷酷なまでの実力社会である。
数斗は大蛇の頭にわずかに残されている女の額に触れた。
すると、女は人の顔を取り戻し、彼女は自分で驚いたように上半身を起こした。しかし、静世の術の影響だろうか。彼女の体は大蛇の頭から徐々に灰となっていく。

「わたくしは……」
「君はよく頑張った」
「……恐ろしい方でございますね。わたくしをお許し下さいますか」
女は目を閉じた。
狂気は消えて、死に際のくたびれた老人を思わせた。
「俺は初めから、あなたを憎んではいないよ」
うつむいた女は、子供のように大声で泣いた。モードレッドの名を呼びながら、ようやく死ねると歓喜して、灰になっていった。

※

残った残骸を静世が改めて焼いた。
全てが消えていく中で、静世は数斗を見上げた。
「閣下？」
「貴恵村だよ」
ポケットを探った。だが、薄手のセーターしか着ていないことを思い出して、ズボンのポケットを探る。
ライターしか出てこない。朝に吸ったのが最後だったらしい。
「すまないが、煙草は持ち合わせていない」
メネッセが申し訳なさそうに言うので、ライターはポケットに戻した。
「グラールなら聞いたことあります。極悪非道の凶悪吸血鬼」
「蒸し返すなよ」
数斗は目算をつけて歩き始める。
「逆だ」
情けないが、メネッセに呼ばれて戻る。
「七百年ぐらい前に、消息がわからなくなったって、マイスターが残念がっていました。その頃、マイスターはイギリス支部にいたそうで、もう百年早ければ、捕まえられたのに、と」
「……そりゃ、残念でした」
メネッセが炎玉で示す方向に歩き出す。

「俺も、聞いたことがある」
静世に続いて、メネッセまで呟き始めた。いい加減、勘弁してほしい。
「グランドマスターのご子息が、凶行の限りを尽くして行方をくらましてしまったという話だ」
間違ってはいない。
今にして思えば、若気の至りというものだ。
「グランドマスターの？　本当ですか？」
「あのな。アレの息子なんて何人いると思ってんだ。百三十二人いるんだぞ？」
「全員とお知り合いなんですか？」
「……不本意ながら」
両親の次にタチの悪い兄弟達が思い出されて、顔をしかめた。多くは語りたくもない。
「でも吸血鬼なんて、兄弟意識は薄いから。何やってるかまでは知らない」
炎玉が先行し、暗闇を照らしていくが、辺りは柱ばかりだ。天井に向かって、三人分の靴音が反響する。
「そうなんですか？　朝香は可愛いですよ。あの口うるさいところとか」
本人が聞けば、力いっぱい異論を唱えるだろう。
数斗も、可愛いところと口うるさいところが同列にしていいものかどうか判断に苦しむ。
「俺たちにしてみれば、朝香と静世は娘のようなものだから、何をしようとどちらも可愛いが」
メネッセが真っ直ぐ静世を見て生真面目に言うので、静世の顔が赤くなった。
恥ずかしい連中だ。
炎玉が止まった。
扉がある。

青白く光っている観音開きの扉は、見上げると先の見えないほど高い。
メネッセが押してみるが、扉は開かない。
仕方なく数斗が押すと、恐ろしく素直に動いた。
「見た目より馬鹿力なんですね」
静世がいつもの調子で言うので、数斗はひきしめていた表情が脱力していくのを感じた。
開いた扉の奥に踏み出すと、鏡のような床面が遠くまで続いていた。
黒光りする部屋である。
黒い壁面の他には柱すら見あたらない。
その最奥に、白コートに身を包んだ、白い髪の男が、こんな場所では質素に見えるような一脚の木製椅子に座っている。
その隣の床に、朝香が寝かされていた。
「ようこそ」
五十メートルほど離れているだろうか。だが、男の声は耳の側で聞いているのではないかというほど、よく聞こえた。
扉が重さに任せて閉じた。
「ハネイアは死にましたか」
「ああ」
「死にましたか……」
溜息をついて、男は椅子から立ち上がった。
「そういえば、自己紹介が遅れておりました。わたくしはモードレッド。人で在ったときは裁判官を務めておりましたが、今は子爵を名乗らせていただいております」
モードレッドは手を差し出した。
すると、数斗達の目の前に三脚の椅子が浮かんできた。
「遠くから失礼を」
静世達は不審な目で椅子を眺めていたが、数斗が座ると倣って座った。

再び椅子に腰掛けたモードレッドは自嘲気味に顔を歪めた。
「お恥ずかしいことです。五百歳を数えるというのに、昼間に思うように動くことができない」
血を主食にしている吸血鬼は夜行性の性格が強い。それに、昼間に動ける吸血鬼の絶対数は少ない。
「私は、五百年前、一人の吸血鬼と出会いました。その頃の私は、神の裁きによって女達を殺していく裁判官の職に疑問を持ち、教会を脱会して、魔術に自分の生きる意味を見出していました。私は永遠の命をテーマに研究を繰り返していたのです。しかし、研究すれば研究するほど不可能だということがわかり、挫折しかけていたのです。そんな私に、吸血鬼は様々な知識を与えてくれました。魔術の摂理、妖怪の世界の話……その目新しい話の中にあなたのお話があった。私の生きていた時代より遡り、二百年前にはすでに姿を消していたあなたと、彼女は兄弟だと話してくれました。私はそんな不思議で奇妙な話にのめり込んでいくうちに、特に吸血鬼の、彼女の話が魅力的に思えてきたのです。私は、吸血鬼になりたくなったのです。私は彼女に頼み込みました。ですが、彼女はしきたりがあるから、と断り続けました。彼女は、吸血鬼の暗く、長い生ける悪夢を知っていたのです。当時の私にはわかるはずもありません。ある日、私は彼女を教会に呼び出し、手首を切りました。このままでは私は死ぬと彼女を脅したのです。優しい彼女は、私を吸血鬼にしました。しかし、私を吸血鬼にした後すぐ、彼女が病身だと私は知った。吸血鬼にとって、血は薬にもなるが毒にもなる。彼女にとって、血は毒となってしまった。……彼女と過ごしたのはほんの十年ほどでした。十年目に、彼女は死に、私は有力な貴族の家人になることもなく、国を放浪しました。その間、私は病身に苦しむ人、人生に絶望している人々を吸血鬼にすることで救おうとしてきました。その結果、私は大量殺人を生みました。私は、あまりに無知だった。洗礼者の約半数が血の契約により、血の味を覚えてしまうということも、血に酔い、血のみを不必要に求めてしまうことも、知らなか

ったのです。今更、ここで、今まで殺してきた人々に悔いようとは思いません。私はただ死にたくなかった。ただ、それだけなのです」
モードレッドは深く息を吐いた。
「私には、吸血鬼という種族がどういうものなのかわからなかった。幾人かの吸血鬼の知人から教わりもしたが、人間と同じように、その存在理由がわからない」
見極めようとしているのだ。
「だから、あなたと話をしてみたくなった。そして、百年以上かけてあなたを捜し、こうして話すことができた」
二つの種族の狭間を見極めようとしている。
「いざ目の当たりにしてみると、私はただ単に、話を聞いてくれる相手が欲しかっただけのような気もしてきます」
期待は往々にして裏切られるものだ。
「あなたの問いに、俺は答えられない」
モードレッドは思わぬことを聞いたように、顔を上げた。
「答えるべき答えがないからだ」
「……あなたでも……あなたほど、長く生きていてもわからない……」
「老人が全て正しい答えを持っているわけじゃない。個々人の経験は限られている。いくら長く生きていたからといって、答えは見つかる物ではないし、恐らく一つの答えはない。無数に存在する可能性の中から見つけ出す他に方法がない。だから、吸血鬼の名前は一呼称ではない」
答えは自分で作り出しても良いのだ。そうして、それが答えになっていく。
「ノーブル・レイス。ノーブル・ブラッド。オリジナル・シン。一番、古い呼称はエミグラントだと言われている」
「……移住民？」
「そう。自らを移住民と呼んでいる辺り、吸血鬼は案外、宇宙人だったのかもな。だが、時代を幾つも渡って、こう呼んだ奴もいる」

遠く離れた存在でありながら、似ている種族を、彼は皮肉と愛着を込めてこう呼んだ。
「フェルン・ナハバール。遠い隣人。吸血鬼は人間の遠くて近い、隣人なのだと」
「……遠い隣人…」
「実際のところ、その人にも吸血鬼と人間の分かれ目なんて見えていない。本当は一つの種族だったんじゃないかって説もある」
モードレッドは額に手を当てた。
「同じ種族……？　では、私は間違っていなかったのか？」
自問しながら、モードレッドは笑い声を上げる。
「ハハハハハハ……！　やはり、あなたは素晴らしい。私の欲しい答えを渡してくれた。……あとは」
モードレッドは立ち上がり、床の朝香の首に手をかけた。
「あなたが私の血肉となってくれさえすればいい！」
「朝香！」
静世が十枚以上の札を投げた。
普段、口にすることもない呪を大声で張り上げる。
「解！」
札は突風のように空間を切り裂き、モードレッドを襲撃する。だが、圧倒的な破壊力の札を、モードレッドはいとも簡単に掴み取った。
「児戯だな」
それで怯む静世ではない。今度は持っていた札を全てばらまいたのだ。
札はちょうど球形を作って並び、静世の触れた札が鳥のように散開する。
その札に青白いプラズマが宿った。
静世と同じように駆け出したメネッセが目に見える静電気を飛ばしている。その形相が険しくなると、人の皮がむけて、額から角が生えだした。

雷を帯びた札の鳥が一斉に羽ばたいた。
白髪の吸血鬼目指してプラズマを放ち、遊撃する。
静世は眉を吊り上げた。
「……あなたの“親”、病身の吸血鬼なんて言ってたけど、本当は、あなたが殺したのね」
さすがに立ち上がったモードレッドは嘘のように杖を取り出した。
歯をむき出して、嗤う（わら）。
「そう」
杖の先についている馬の彫像を回して、するすると柄を引いていく。
現れたのは一振りの細剣である。
「黒魔術（ソーサリー）の基本は、食物から力を取り込むこと。……私は彼女を殺し、喰った」
向かってくる鳥を一太刀して、突き破った。一線し、薙ぎ払うと鳥はただの紙切れに戻っていく。
モードレッドは優雅に地面を蹴った。
鳥は雷で迎え撃つが、あっさりと切り捨てられてモードレッドを打ち落とすことができない。
白い凶器が降り立ったのは札を操る静世の正面。
残った札を静世は集めるが間に合わない。
その前に、巨漢が立ち塞がる。既に角がこめかみからも突き出たメネッセである。
メネッセは唸りを上げて拳をモードレッド目掛けて振り下ろす。
だが、彼は穿ったのは鏡面の床。
飛び散った破片の先から凶剣が頭上から放たれる。
倒れるメネッセの裏から、飛び出したのは札である。
札はモードレッドの全身に張り付いて動きを封じてしまう。振り下ろした剣ごと、ミイラの包帯のように巻き付いて床にモードレッドを封じる。
息をついた静世は数斗を見遣った。

数斗は、座っていた椅子から一歩も動いていないのだ。
静世は数斗を冷ややかに睨みつけた。だが、何も言わずにメネッセの傷具合を見に行った。
メネッセは左肩を切られてはいたが、重症ではない。
「さわるな。俺の血は毒だと言ってあるはずだ」
静世の手を払って、メネッセは自分の左肩を掴んだまま、床に膝をつく。
静世は床に倒れたままの朝香に駆け寄っていった。
鏡面の部屋の不気味な静けさ野中で、静世の靴音が響く。
数斗は思わず立ち上がった。
今、何時だ。
「メネッセ、今何時だ！」
弾かれたようにメネッセも辛うじてついていた腕時計を見遣る。
「午後七時……！」
日は完全に落ちた。
「静世！　やめろ！」
静世の手が朝香の肩に触れた。
朝香が起きあがる。
鈍い音がした。
「……あ…」
長く伸びすぎた、ナイフのような爪が静世の腹に突き刺さっている。
その爪は、彼女と同じような細い指から伸びている。
「…朝香……？」
静世は自分を突き刺している朝香を引き寄せた。
爪が深く突き刺さる。
内蔵が傷つくほど刺さったらしく、静世は血を吐いた。
「朝香……」
朝香は目を開いてはいるが、碧眼に光はない。
「朝香……」

静世は呪のように続けて、妹の名前を呼ぶ。
数斗は急いで駆け寄った。
血臭が鼻をつく。
頭痛が額を突き抜ける。
「やめろ！　静世！　今ここで、朝香が起きたら……」
静世の声が届いてしまったのか。
「……し、静世姉さん……？」
朝香は自分を抱く静世を、わけもわからず見遣る。
「朝香……」
だが、自分の手に気がついて朝香はこれ以上ないほど顔を歪めた。
自分の指先が自分の姉を刺しているのだ。
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「……落ち着きなさい。朝香」
静世は自分に突き刺さっている朝香の腕を掴んだ。肉が余計に切られて、血臭が濃くなった。
このままでは、数斗の方が発狂して役に立たなくなってしまう。
「朝香！」
静世に呼ばれ、朝香は泣きながら姉を凝視した。
「……いい？　ゆっくりと、そっと引いてちょうだい」
静世は朝香の腕を掴んで、ゆっくりと自分の腹から爪を引き抜いた。
爪は役割を終えたと思ったのか、すぐさま元通りになり、あとには血塗れの朝香の右手が残った。
「わ、私……」
「落ち着きなさい……。朝香……」
静世はすでに気力だけで意識を保っている。
やってきたメネッセが近くに座った。彼の手は自分の血にまみれていて、静世達をさわれないのだ。
鬼の血は人間を殺す。
朝香は静世を抱きかかえた。

「お、お姉ちゃん……私…」
「よく聞け。アンタは今、人間でもなく、吸血鬼でもない」
数斗はセーターを脱いだ。
静世が腹を押さえつけているごとセーターを巻き付ける。数斗はまたシャツ一枚になってしまった。
「これを動かすな。いいな」
メネッセに言い置いて、朝香に向き直る。
「俺がアンタに呪をかけているが、最後は本人がしっかりしてないと最悪、アンタは吸血鬼になる」
朝香は息を呑んだが、ぎこちなく頷いた。
「だから、アンタは人間でいたいとずっと思ってろ。姉さんを刺したくなんてなかったんだろ？」
「……私……」
数斗は朝香に服を掴まれて瞬いた。
「……私、姉さんが嫌いになるときがあるの。そういうので殺してしまったりすることある？」
血塗れの手で掴まれた白いシャツは、瞬く間に血で汚れた。
少しためらって、数斗は朝香の手を握った。
「ない。だから、アンタは人間でいるんだ」
朝香の手をはがす。
彼女は静世の体を抱きかかえた。
「……お姉ちゃんを助けて」
こんな時に不謹慎だとは思うが、くしゃみが出そうになった。
「風邪をひかないうちに片づける」
シャツ一枚はさすがに寒い。
「風邪の心配などなさらなくても良い場所を、知っていますよ」
甘ったるい腐敗臭のする声である。
振り返ると、数斗達が座らされていた場所に少し前に、先ほど静世が捉えたはずの吸血鬼がまるで平気な様子で、すっかり身形を整えて立っている。

「朝香を操ったな？」
「さすがに私も危なかったので。難しいことでしたが、そちらのお嬢さんを使わせていただきました」
「……また面倒くさいことを……」
「お陰で面白い悲劇が見られました。お楽しみいただけましたでしょう？」
「変態と一緒にするな」
言って、数斗は大きなくしゃみをしてしまう。ついでに鼻水まで出そうになる。
「同じじゃないですか。いいえ、あなたの方が変わった方だ。酔狂で人を殺したり、助けたり。敵ばかりを増やしますよ」
「そういうアンタは敵か？　味方か？」
「私は敵でも味方でもありませんよ。あなたの捕食者です！」
モードレッドは剣を引き抜き、跳躍した。
数斗はその場から一歩、二歩進み、同じように跳躍する。
モードレッドが剣を突きだしてくる。数斗は身をかわす。交わしてそのまま剣線を避けると、モードレッドの後ろに立つ。
「目的は何だ？」
「私の興味は、初めからあなたの血だ」
モードレッドは振り抜きざまに踏みだし、逆袈裟切り。
それを交わして、軽く後ろに飛ぶ。
続いてモードレッドは床と平行に跳躍して呪をかけた剣で空中を薙ぐ。真空の鎌が生まれて追撃してくる。
「ムダムダ」
手を差し出して、かまいたちに触れる（・・・）。風を分解して、ただの微風に戻してみせた。
予想通り、モードレッドは疑問符を顔に浮かべて数斗を睨みつけた。
これが数斗にとって、一番特別な特技だった。
物質の元素に触れる力。未だかつて、この能力を使えるのは実父

ぐらいしか見たことがない。
大いに驚いてもらわなくては。
モードレッドは剣先を床に這わせ、摩擦で炎を起こす。
それに呪をかけて、炎は派手な竜の形を象った。そのまま、竜はのたうち、数斗目指して突進してくる。
それを瞬時に自分で吐いた二酸化炭素で閉じこめて、数斗の眼前で竜は霧散した。
それも束の間、明らかに人工的な津波が高い天井に届くほどの高さで押し寄せる。
数斗はポケットに入っていたライターを取り出した。その間に酸素と反応させ、水を全て消し去る。水に乗じていたモードレッドを空中に見つけて、ライターに火をつけて投げた。
水素爆発。
部屋全体を総べるほどの爆炎が上がる。
さすがに全ての火炎を避けきれなかったモードレッドは、体中から焼け焦げたと思しき煙を上げて床に降り立つ。
細剣の柄を握りしめて、改めて数斗を睨んでくる。
モードレッドの体が揺らめいた。
そして、消える。
だが、出てくるところは分かっている。
後ろ。
寸瞬前まで頭があった場所に剣が突き出された。
半身を引くと、袈裟切りがくる。
体を傾けてやり過ごし、逆に逃げる。間髪入れず飛んできた蹴りを避けて、後ろに飛ぶ。
間合いがとれると、モードレッドは追ってはこなかった。
「……なぜ、そんなことができる……元素を動かすなんて……」
知らなかったわりに勘がいい。普通は、数斗を魔法使い扱いしてくれるのだ。
「血筋。俺は純種（ノーブル・ブラッド）じゃないから」

「そんな術を扱える種族は聞いたことがない！」
「悪いけどさ。アンタと俺じゃ、生きてる世界が違うんだ」
モードレッドは不審に顔を歪める。
「信じるかどうかわからないけど。俺の母親は人間とノーブル・ブラッドのハーフと人間の間に生まれたクオーターで、親父はノーブル・ブラッドと魔族のハーフと神族と人間のハーフの間に生まれたクオーターなんだよ。だから、俺は人間とノーブル・ブラッドと神族と魔族の血が混ざってる雑種中の雑種。つまり、俺のひいジイさんかバアさんがノーブル・ブラッド、神族、魔族、人間の四種族にまたがってるわけ。人間の曾祖父母はさすがにいないけど、魔族と神族とノーブル・ブラッドはまだ生きてるかな」
案の定、モードレッドは余計に顔をしかめた。
「神？　魔族？　そんなものが居るわけないだろう！　あんなものは偶像に過ぎない！」
「だから、世界が違うんだって。第一、何でこんなややこしい嘘をつかないといけないんだ」
数斗は肩を竦める。
「だからといって……」
「信じろとはいわない。無理はするな」
「無理？　私は常識の通用しない場所で生きていきた！　それを……」
「確かに、人間の世界は常識が通用しないな。アンタは誰よりも人間らしいよ」
欲に忠実で正直な人間そのものだ。モードレッドは剣を取り落とした。
「……人間らしい……？　私が？」
「――憐れだな」
妖怪とは憐れな生き物だ。
否。
長く生きていても、何の答えも見いだせない者は憐れだ。

「五百年生きて、そんなことも考えなかったのか？　アンタは無駄に長く生きすぎたようだ」
膝をついたモードレッドに、数斗は興味を失って部屋の奥で様子見ている朝香達に視線を移した。
静世の容態は良くはないはずだ。
「――殺せ」
聞き逃してしまうような声だった。
数斗は溜息をついた。
「そこまでしてやる義理はない」
ふと思い出す。
自分も、こうして誰かに殺してもらうことを望んだことがあった。
そうして、やはりそこまでしてやる義理はないと断られたのだ。
お前は愚かに生きろと。
「……アンタ、ミネルバを殺したと言ったな」
「……その名は……」
「俺の兄弟だ。確かに病気で死んで、砂漠で焼いた。……思い出したよ。アンタが俺に、妹のことを知らせてくれたんだ。今と違って貧相なガキだったから、わからなかった」
サングラスを外して、モードレッドを顧みた。モードレッドの目が見る間に見開かれた。
「覚えはないか？」
「……あなたは、ミスタ・シュリブクス……？」
五百年も前のことだ。
妹の一人が危篤だというので、駆けつけると、傍らに一人の男がいた。ミネルバが病気になってしまったのは自分のせいだと泣いたその男は、確かにモードレッドと名乗った。
まだ吸血鬼としては若かったミネルバが残した、最初で最後の洗礼者。
「ミネルバは悔やんでいた。アンタを洗礼したことを」
モードレッドは半ば茫然と、数斗を見上げた。

「会えて良かったよ」
手を差し出すと、しばらく不思議そうにモードレッドは眺めていたが、やがて数斗の手にしがみつくように握り替えした。
「……私も、あなたにもう一度会えて良かった……」
そして、何百年ぶりかの感謝を祈る。
「……神に…ミネルバに感謝します」

封筒

静世の怪我は全治三週間と診断された。
あれだけ大穴を開けたというのに、内臓に傷がついていなかったという。
しばらく並んで療養していた朝香だったが、三日後には牙痕も消えて、今やかさぶたも残っていない。
掻くクセがついたのは、静世が妙なことを朝香に教えたからだった。
あの男が傷口から呪をかけてくれたから、助かったのだと。
直接、傷に口を押しつけて。
朝香はまた傷跡を掻いた。
三週間は経ったが、まだベッドで安静にしている静世が、コーヒーが飲みたいなどというので、仕方なく台所へ向かっている。
台所にはあの男がいるはずだ。
モードレッドは姿を消し、事件と呼べるのかどうかわからない事件は一応、解決したのだが、静世と朝香が怪我で抜けたため、メンバーにあの男が補佐として入ったのだ。
だからかれこれ、あの男がここに居座って二ヶ月が経とうとしていた。
ダイニングに入ると、いつもの長身が見当たらなかった。
家事が趣味だなどと言って、教授を困らせた挙げ句にダイニングを自分の城のように居座っていたというのに。
キッチンの隅に、ミヤコがしゃがんでジッとしている。
「ミヤコ。アイツは？」
彼女は押し黙って、うつむいた。
ふと、思いついてダイニングを出た。
ここより上の階にある一室。
エレベーターを昇った一角に。

廊下を進んで一番奥。
この部屋をノックするのは初めてかもしれない。
返事はなかった。
ドアを開く。
ベッドしかない、簡素な部屋だった。
ひらりと何かが足下に舞い降りた。
一枚のメモである。
『約束の期限は過ぎたので』
簡潔な、書き殴ったような文面だった。
裏をめくってみると、こんな追伸があった。
『汚れた服は捨てておいてください』
何処までも勝手だ。きちんと整えられたベッドの横に、ゴミ袋が置いてある。
開いてみると、捨てる服だというのに几帳面にたたんである。
どこまでもマメだ。
一枚は見慣れた黒のセーターだった。何度か洗ってみたのか、縮んでいる。静世の傷をしばったセーターだ。
もう一枚は見慣れない上着だった。ベージュのジャケットである。肩口から腕、腹にかけてひどい染みが残っている。これも漂白剤を使って洗ってみたらしいが、ベージュの色が抜けただけで染みはとれていない。
「……あ」
朝香が咬まれた時に、肩を縛った服があった。
朝香はベッドにジャケットを放り出した。

砂漠

玄関に入ると、被っていた布から砂がこぼれた。
「外はひどい嵐のようでございますな」
時代遅れのランタンを持って現れたのは、やはり古き良き時代に取り残されたような執事の老人だった。
「ああ」
布を剥いで、執事と一緒になって砂を払って腕に担ぐと、彼は少し笑った。
「今度は戦争屋にでも？」
言われて、自分の格好を見直す。
一般的な兵服である。肩にサブマシンガンはないが、腰に拳銃があるのはお慰みというところか。無論、黒に染めた髪に、サングラスはあるのでテロリストにも見えないことはないが。
「自衛隊だよ」
「自衛隊？　若が？」
「食うに困ってね。それにただでイラクに行かせてくれるっていうから」
「日本も災難なことです。お役にたてない方のために幾ら払ったことか」
「まったくだ」
二人して失笑しながら、正面の階段を上る。
この地域の屋敷にしては珍しい造りの家である。イギリスの片田舎にでもありそうな瀟洒な二階建てで、一階には台所と四つの部屋、二階には三つの客間とこの家の主の書斎がある。
半ば砂の下にあるこの家は昼でも暗い。
「元気そうだな。エリアル」
「はい。おかげさまで。旦那様は驚かれるでしょう。家になど一度も寄りつかなかった若が立派な兵士姿でお帰りになられたのですか

ら」
慇懃な言葉だが、何故か皮肉を言われている気分だ。
「おふくろは？」
「奥様はお客様をお迎えに」
「珍しいこともあるもんだ」
奥まった場所にある年季の入った古いドアをノックする。するとくぐもった声が応えた。
「生きてるか、親父」
ドアを開けると、マホガニー製の書斎机に足を乗せている男がいる。
瑞々しい白皙の容貌の男である。名工が彫り込んだような端正な容貌を彩るのは肩より長い銀髪で、その姿はさながら美しいと賛美された何処かの男神のようだ。だが、切れ長の、あらゆる光を呑み込むような漆黒の瞳が華やかな印象を払拭する。
「おお、帰ったか。バカ息子」
正真正銘の実父である。
バカみたいに上等な三揃えのスーツを着て、机に脚を乗せていても、だ。
「相変わらずの阿呆面だな」
「お前も相変わらずの減らず口で嬉しいよ」
近くにあった椅子には本が積み上げてあった。
この書斎、おふくろが称するには、本の巣窟なのだ。
壁面全てに取り付けられた本棚を問わず、革張りのソファ問わず、本が積み上げてある。
椅子の本を押しのけて椅子に腰掛ける。
「相変わらず、いい根性だ。お前かメリアぐらいだよ。俺の書斎に入って、本を押しのけてでも座ろうとするのは。やっぱりお前はメリア似だねぇ。グラール」
逆におふくろや他の兄弟にはお前は父親似だと断言される。
「実は、橋の下から拾ってきた息子だとかいうことはありえないか

な」
「ありえない。君は、俺とメリアの大事な息子だよ」
こんなことをにこやかに言うこの男は、息子の目から見ても胡散臭い。どうしてこんな男におふくろは引っかかってしまったのだろうか。
「しかし、どうしたんだ？　お前、吸血鬼の王にでもなるつもりで飛び出したんだろ？　どうまかり間違って兵士なんかになった？　兵士になったなら将軍ぐらいになってから顔を出せ」
ちなみに自立したときは、公爵になるまで顔を出すなと言われた。
「金がなくなったから自衛隊に入った。で、イラクに来たからついでに顔を出しに来ただけ。何も親父の顔を見に来たってわけじゃない」
「まさかメリアに金の無心？　やめておけ。殺されるぞ」
どこまでも冗談に聞こえるが、冗談ではない。おふくろは、恐ろしく素晴らしい剣の才能の持ち主で、下手なことを言おうものなら首が飛ぶ。
「……冗談でも言うな。親父。おふくろの顔を見に来たんだよ。手紙が来たから」
どういうわけか、おふくろは何処へ行っても一年に一度、手紙を寄越すのだ。今年は自衛隊の宿舎に届いたらしく、ちょうどイスラエルに行っていたので、郵送が遅れた。受け取ったのはイラクに設営された自衛隊宿舎だ。
いつもは元気でやっているか、というようなことだけ書いてあるのだが、今年に限って顔を出せとあったのだ。
「どうだ、紛争は」
明日の天気を聞くかの如くの口調だ。
「どうもこうも。兵服着て歩いてるだけで銃弾か勧誘が来る。そっちは」
「増えてるな。面倒くさいから、お前、掃除しといてくれないか」
国が荒れるとグールと吸血鬼が増えるのだ。

「仕事だろ。自分でやれよ」
「いいじゃないか。せっかく、そんな奇麗な顔をやったんだから、いっそのこと大臣にでもなってな…」
「顔で国が動かせるかよ」
「やってみないとわからないぞ。アイドルみたいな人気になって、税率アップも思いのままだ」
「……詐欺じゃねぇか」
くだらない話題に花を咲かせていると、ノックが鳴った。
「旦那様、奥様がお戻りです」
「メリアが？　戻った！」
年甲斐もなく足を乗せていた机から足を下ろし、今まで仕事をしながら息子と会話していたように取り繕う。そして、
「バラすなよ。バラせば、お前のあることないこと言いふらすからな」
悪ガキのような口止めをして山積みにしている未処理の書類に手をつける。
「ただいまもどりました」
悪巧みの時間をきっちりと計算したように声がかかり、優雅に一人の女性が部屋に入ってきた。
娘のように長い髪を垂らした可愛らしい女性である。明るい茶色の髪に、小作りの顔、ぱっちりとした瞳はバラ色のようなクリムゾン。上品に微笑んでいれば、誰の気持ちも和やかにする。若々しいパンツスーツだが、ともすれば十代の少女に見える。
「久しぶりね。グラール」
と、穏やかに微笑んで抱きいてくる仕草はいいのだが、腕が首に巻き付いた。
「帰ってくるならキチンと連絡しなさいと言っているでしょう？」
首に関節技をきめられて、必死で彼女の腕を叩く。
彼女が実母である。
「わかった！　わかったから！」

「メリアの勝ちー」
わざとらしく言ったのは親父である。何処までも子供だ。
「あなたも！」
おふくろは親父をきっと睨んだ。
「仕事もせず、ダラダラと息子をいたぶって！」
「いや……いたぶってるのは君の方じゃ……」
「文句でも？」
「いえ……」
ざまぁみろ。
そう思うあたり、自分でも親父の子供だと確認してしまう。
「奥様」
短く執事によびかけられて、おふくろは今まで息子をしめていた腕を外した。
「エリアル、狭いところだけれど、ちょうど良いわ。お通しして」
そういえば、珍しい客を迎えに行っていたのだ。
足を組んだまま、ドア側を見遣る。
まさに、珍客だった。
「ミヤコ……！」
静かに入ってきたのは、日本で別れてきたはずの少女だった。こちらに歩いてきて、おもむろにしがみついてくる。相変わらず表情がない。
その様子を見て取った親父が何やら不審な顔で口元を押さえた。
「な、なんだ？　お前、童女趣味に趣向変え？　そんな危ない人に？」
「阿呆！」
一喝しておいて、腕にしがみついているミヤコを見遣る。
「どうしたんだ？　アキラは？」
「私ならここに」
変わらない金髪の少年が笑みを浮かべて、こちらに一礼し、おふくろと親父に向かって深く頭を下げる。

「マスター。お久しぶりです」
「相変わらず。堅苦しいなぁ。君のウチでもあるだろう」
「そうよ、アキラ」
おふくろがアキラの金髪を撫でると、アキラは少年らしくはにかんで笑みを浮かべた。
「……マスター。私はもう、一女の父なのですが…」
「あら、ごめんなさい。結婚もしないでフラフラしてるのがいるものだから、つい」
あからさまな挑戦をしてくるのがおふくろだ。度胸だけは人一倍ある。
「貴恵村」
幾度となく聞いた名字だ。
だが、かすかな記憶をくすぐる声だった。
「あ、驚いた」
「……朝香？」
名前を呼ぶと少女は珍しく笑った。亜麻色の髪を短く切ったせいなのか、記憶にある仏頂面より大人びて見えた。
どうして彼女が。
質問はより早く口をついた。
「何か悪いものでも食べた？」
途端に、彼女の顔が記憶の通りに不機嫌になった。
「……どういう意味よ」
「いや……笑った顔、見たことなかったから」
朝香の顔がカッと赤くなった。
何か悪いことでも言っただろうか。しかし、彼女は怒鳴ることなく、そのまま押し黙ってしまった。
「バカ」
隣に居たおふくろがコツンと頭を叩いた。
「他に言うことがあるでしょう？　言うことが」
「ああ……」

そういえば。
「どうしてここに？」
「もっと気の利いた言葉はでてこないの！」
おふくろの腕が素早く首を捉える。
「は？　そのわけのわかんないことで首をしめないで！」
「私たちは仕事で来たのです」
アキラは助け船を出すつもりなのか、おふくろの凶行を止めようともせず笑んだ。
ようやくおふくろが腕を緩めたので素早く逃げる。
「仕事？　支部を移った？」
「いえ。日本支部です」
「じゃぁ、何で……」
言いかけて、嫌な予感がよぎった。
悪い勘は良く当たるのだ。
助けを求めて視線をさまよわせ、最後に何故か仏頂面の朝香と目があった。
「ねぇ？」
彼女は口をひん曲げたまま、しばらく黙っていたが、あきらめたように言ってくれた。
「アンタを迎えにきたのよ」

運命の神様。
いるなら、とっとと出てきて下さい。
そして、どうか一発殴らせて下さい。
人だけではなく、妖怪の命さえ握っているあなたに八つ当たりと親愛をこめて。
ここまで長く生きてきたことを感謝しますから。

「汝、隣人を愛せよ」
面白がるように笑ったのは親父である。

「されど、汝に隣人はなし」
吸血鬼として、好き勝手なことをしていたときに両親から贈られた言葉だ。
「いい隣人を見つけたじゃないか。生きていて良かっただろう？愚か者」

空の下

今日もフロアは混んでいた。
幾人もの人が掲示板を見て溜息をついて、検索画面をみて挫折していく。
そんな中、何やら鬼気迫る様子でパソコンにしがみついている男がいる。
サングラスをかけてはいるが、理想を偶像化したような端正な容貌の男である。ただ、すらりとした長身には真っ黒なコート、そしてあまり似合わない黒髪である。
「貴恵村数斗さん」
受付で名前を呼ばれているのだが、パソコンの検索画面に見入っているのか気がつかない。
「呼んでますよ」
パソコンの順番を待っていたフリーターらしい青年が呼びかけると、愛想笑いで場所を譲った。
そそくさと受付に顔を出した男を見遣って、受付嬢は男が書いたらしい書類を突きだした。
「既にご職業についておられる方に、斡旋はできません」
「そ、そこを何とか……」
「できません」
押し売りを断るかの如く、即答すると、受付嬢は次の名簿を呼び上げた。
男は居場所をあっけなく追い出されて、職業安定所の入ったビルを出る。
すると、その男の眼前に、一人の女が立った。
淡い茶色の長髪の女である。かっちりとしたスーツ姿で、仁王立ちしている。
「貴恵村さん」

女は怒りを押し殺すように男に呼びかける。
だが、男はそれには応えず、その場を逃げ出した。
はずだった。
手慣れた様子の大男に首根っこを掴まれたのだ。
女はそれを確かめずに、さっさと歩き出す。
「行くわよ。メネッセ」
「め、メネッセ。見逃してくれ」
男が拝むが、巨漢はすまなそうな顔をしながら男を引きずっていく。
「すみまない。貴恵村さん」
「貴恵村さん。毎回毎回、あなたのために労力をさくのは、やぶさかではないわ。でももうちょっと理解がほしいわね」
先を歩いている女は振り返りもせず言った。
男は最後まで望みは捨てない覚悟なのか、あきらめ悪く粘った。
「こういうことはだね。相互理解が必要だと思うんだ。瀬戸さん」
女は道路沿いに止めた車の後部座席側のドアを開く。
「仕事よ」
ビルの上にある雲は、地上をあざ笑うかのように蒼空に消えた。
それはとても、鮮やかに。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8779k/

オリジン

2010年10月8日14時12分発行